

---

# 2018年 地中海病院

GFJ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

2018年 地中海病院

### 【Nコード】

N0204E

### 【作者名】

GFJ

### 【あらすじ】

10年後の日本。突然自宅で倒れた沙希の母親。救急搬送先として、民間病院『地中海病院』を指定した主人公だったが……。【お知らせ】ボイスサイトオープンしました。<http://www.voiceblog.jp/kikkachichu/>

## 第1話 救急要請（前書き）

「2018年菊花病院・2018年地中海病院」を書籍化しました。  
amazonなどオンライン書店で購入可能です。

注） 今回の書籍にはDVDは付いていません。DVD化も現在  
進めていますが、画像作成に時間がかかっています。ごめんなさい。

ボイスサイトは最近更新しておりませんが、

<http://www.voiceblog.jp/kikkachichu/>

でお楽しみいただけます。

## 第1話 救急要請

この小説は、前作『2018年 菊花病院』の姉妹作になりますが、単独でもお楽しみいただけるようにしているつもりです。

背景として、2014年に国民皆保険制度が破綻した設定になっています。

前作を読まれた方へ……第1話のスタートが前作と同じになっていますが、途中から微妙に違ってきます。そこも含めてお楽しみください。

2018年9月10日・・・

「母さん！ 母さん、しっかりして！！！」

大変！！

どうしよう……

それは突然だった。

台所で昼食の準備をしていた母が『吐き気がする』と流しの淵に手をついたかと思うと、突然、膝から崩れ落ちた。

慌ててその場にしゃがみこんで、母を揺する。

だらりと力の抜けた母は重かった。

「母さん！ 母さん……」

そうこうしているうちに、私の両足に何か生暖かいものが染み込

んできた事に気がついた。

失禁……

母は、意識を失い、同時に失禁して床に倒れこんでいた。

大変な事態に、私の方がうろたえる。

わぁ、どうしよう。ホントにどうしよう……

足が震えてくる。

救急車……

ちよつと待つて。

救急車は、5年前から有料化されていた。とりあえず3万円あれば救急車を呼ぶことができる。

母をその場に置いて、財布を確認する。

3万円ジャスト。

どうしよう……

母が大変な時だと言うのに、私の頭の中には、動揺する気持とともに、様々な思いが駆け巡る。

医療制度が大幅に替わって、以前のように簡単に救急車を呼んで救急病院へ行く、という時代は終わっていた。救急車を呼ぶ前に、国民保険の利く病院（公立病院）へ運んでもらうか、自費診療の病院（民間病院）へ運んでもらうかを決めておかなくてはならない。

どうしよう……

神様……

その時、私は、友人渚なみの不幸を思い出した。

渚の弟さんが夜中に喘息発作を起こして亡くなったのである。このご時世に喘息発作で命を落とすことがあるのか、と私は啞然とした。

彼の発作は夜間に始まった。両親は車で近くの公立病院の救急外

来まで息子を連れて行った。患者で溢れかえる救急外来。両親はバタバタ走り回る看護師を捕まえて、息子の呼吸が苦しうだから診察を急いでほしい、と懇願した。しかし、医師が救急処置中で少なくともあと20分はこちらへ来られないこと、息子さんの他にも、緊急を要する患者さんが沢山待っていること、を早口で説明されただけだった。そうして、渚の弟は、2時間待たされた末、医師の診察を受ける前に待合室で命を落としたのである。

ご両親は、自分の息子を公立病院に連れて行ったことを強く後悔されている。その無念さは、いかばかりだろう。＜地中海病院に連れていけば良かった＞その自責の念は、今もご両親を苦しめ続けている。家を売っても良かったんだ。隆の命が救えたのなら……。後悔しても後悔しても、時間の針は決して元に戻せない。幾ばくかの金を惜しんだばかりに……。息子を失った悲しみは癒えることなく、かえって時間が経つほどに両親を苦しめていく。真綿で喉元を絞められるように。

弟さんの不幸からしばらく経って渚と会った時、彼女は驚くほど憔悴しきっていた。両親の不仲、母親の自殺未遂。彼の突然の死が連鎖反応のように家族を出口のない不幸のトンネルへと追いやった。弟の死を悲しむ余裕も与えられないまま、彼女は両親を支えていくことに疲れ果てていたのだ。

どうしよう……

動揺しながらも、妙に冷静な私がそこにいた。

母の状態は深刻だった。だから急いで治療してもらう必要がある。でも、深刻だからこそ、治療費がバカ高い値段になることも、簡単に予測できた。

母さん、貯金、いくら持ってるんだろうか。

私の貯金は75万円だ。

2年前、私費で保険に加入するかどうか話し合った時、母は言った。

「いざと言うときは、もう、諦めよう。な。保険料支払うより、毎日の生活の方がよっぽど大事。もしも、私が倒れたら、国民保険の利く病院に運んでちょうだい」

元来、元気で働き者であることだけが自慢だった母は、自分が病で倒れることなど考えていなかったのだらう。いや、余裕がなかったという方が正確かもしれない。

まさか、こんなに早く、その時が来るとは……

母の胸に耳を当てる。

心臓は動いている。息もしている。まだ、生きている。

「かあさん！　ねえ、目え覚まして！！　お願い！」

母はぐったりしたまま、ピクリとも動かない。

やがて、鼾をかき始めた。

まずい……

母の顔を横に向けて、とりあえず舌が気道を塞がないようにする。

私は決心して、電話を取った。

保険に入っていないくたつて、お金のことは何とかなる。まずは、

母の命を救うことを優先したい。私は後悔したくなかった。

「もしもし。すみません。救急車一台お願いします」

電話を置いたあと、私は、母の尿で濡れた自分の靴下を剥ぎ取り、台所横の小さな部屋に入って片っ端から机の引き出しを開けた。大事なものがいなくなってあるはずの机。

へソクリや通帳はここにあるはず。もしかしたら、私の知らないところで、広大な土地なんか持つてるかもしれない……

と期待しつつ、そんなわけないか、とため息。

普通預金が240万円、定期預金が650万円。

どうやら、それがうちの全財産らしい。これが母の治療費の上限ということだ。

救急隊が到着する前に、母の下着を替えておきたかった。バスタオル数枚を持ってきて、腰の辺りにかけ、下着を脱がす。重い。何て重たいの。濡れた下着はべっとり臀部にしがみついている。脱がすのが大変だった。

涙が出てきた。

「かあさん……」

バスタオルで下半身を拭いて、ついでに、床もそれで拭く。力づくで清潔な下着を大腿部まで引き上げたところで、サイレンの音がけたたましく鳴り響いたかと思うとすぐ近くでぴたっと止まった。

救急隊員が到着する。

最初に、3万円を請求された。

財布からお金を出す。

領収書を渡された。

「確定申告の際、これも出されるといいですよ。医療費の一部とみなされますからね」

救急隊員はそんなことを言った。

「すみません。あの、スカートだけでも……」

箆笥からスカートを引っ張り出してきて、そう言った私に、

「一刻も早く搬送しましょう。毛布をかけるから大丈夫」

救急隊員は、二人がかりで母をストレッチャーに乗せた。

私も後をついていく。

「希望の病院はありますか？」

「はい。地中海病院でお願いします」

「わかりました」



救急隊員は、地中海病院に連絡を入れたと同時に、サイレンを鳴らして動き出した。

## 第2話 地中海病院

地中海病院へは10分で到着した。

救急車が搬入口に停止すると、すぐに中から数人の職員が出てきた。ガラガラとストレッチャーは中へ運ばれていく。自動のドアを二つ通って、救急処置室内に入った。

ステนレスの匂いのする処置室には、大勢のスタッフがいた。

一番奥の処置台の上には別の患者がいるようで、台を囲んで人々が動きまわっている。

母は、奥から3番目の処置台に移された。

早速、三名ほどの医師が診察を開始し、看護師と思われる人々も動き回る。母を取り囲んで、状態を確認しながら、検査、治療も同時進行で進められている様子である。

救急隊員は、職員の一人に説明をしている。

迅速に動き回る大勢の人たちに見とれていると、医療従事者の雰囲気と一味違う女性が私に近づいてきた。

濃いブルーのスーツ姿、パンプスを履き、首には虹色のスカーフが巻いてある。

化粧が綺麗に施され、お人形のような美人だった。

「日野様のご家族の方ですか？」

「あ、はい」

「わたくし、日野様の本日のクランクを勤めさせていただきます、高尾たかおと申します。日野様の入院手続きをさせていただきますので、まずは、コンシエルジュまでおいでくださいませ。ご案内いたします」

私は、高尾さんの後ろをついて行った。

救急処置室の別の自動ドアから廊下に出る。少し進むとエレベーターホールがあって、その先に広いフロアが開けていた。

さきほどの部屋は、いかにも病院らしいステンレスの雰囲気だったが、ここは全く病院臭さを感じない。強いて言うなら、ホテルのような雰囲気か。

「こちらでございます」

上を見上げると、”Concierge”という筆記体の文字が金色に輝いている。

早い話が『受付』である。

「12番ブースでお手続きをさせていただきますので、どうぞ、中へお進みください」

高尾さんは、おへそのあたりに両手をあて、きつちり30度のお辞儀をして、受付右横のドアを開け、私を中へ促した。

中は広々していて、沢山のドアがあり12番ブースは一番手前にあった。つまり12個の小部屋が用意されていたのだ。

中に入ると座り心地のいい肘掛け椅子が用意されていた。テーブルを挟んで向かい側に、高尾さんが腰掛ける。

「今回は、お母様が大変なことになるれて、さぞかしおつらいことと存じます。私ども、精一杯お手伝いさせていただきますので、お気づきの点やお困りになったことなど、お気軽にお申しつけください」

「あ。どうも、ありがとうございます」

「早速ですが、お母様のご病状が緊急を要しますので、必要な所から説明させていただきます。よろしいでしょうか？」

私はここで小一時間過ごした。

まずは、書類が多いことに驚いた。山のような書類にサインをする。印鑑は要らないそうだ。ここは日本ではないのか。

どの書類も、日本語とその上に英語が記されている。先ほどから明らかに日本人でない人たちを多く見かけたが、ここは多くの外国人が利用していることを書類からも感じる事ができた。テーブルの上の名札も、高尾清美の名の下にローマ字が記されている。

「お会計でございますが、できましたら、クレジットカードでお願い

いいいたしたいと思いますがいかがでしょうか。K Pカードをご使用の場合、0・5%の割引をさせて頂きますので、お客様にとってもお得かと存じます。ご請求は毎月10日締めで月末に請求書をお送りいたします。お支払いは2ヶ月遅れになりますので、その点もご安心いただけるかと。ええっと、本日が10日ですので、今月は本日一日分だけのご請求になりますね。それから……」

高尾さんは、少し口ごもると、再び説明を始めた。

「日野様は、K P保険会社とご契約になっておられなかったですね」

「あ、はい」

「それでしたら、お支払いの方も、それなりの額になることが予想されますので、一括払いが難しい方のために、分割払いもご用意いたしておりますが、いかがいたしましょうか？」

「あ、えっと……」

私は、思案した。

お金のことは、実は、とても心配していることだからだ。

分割払いって、利息がかなり高いはず……

「すみません。利息はどうなりますか？」

高尾さんは、ニツコリ笑ってパンフレットを広げた。細かい字で書かれている説明文を示して、

「年利17%でございますね。一回払いがよろしければ、こちらの欄に丸印をつけてください。あとから分割払いに変更することもできますので、その時には、いつでもご相談ください。その他にも日野様のご都合のいいようにいくつかのコースをご用意いたしておりますので、何でもご相談ください」

私は、少し悩んだが、一回払いに丸印をつけた。

一通り書類書きが済むと、今度は、高尾さんは小さなゲーム機のような機械を私の目の前に置いた。

「これは、お母様がご入院の間、無料でご家族の方にお貸しいたし

ますツールで『地中海姫』と言います。ただ、無料と言いつても、保証金として一万円をお預かり致しますが、機械を返却して頂く時に返金いたしますので。それから、通信費と致しまして、一週間以内のご使用でしたら500円、それ以上の場合はひと月あたり1,200円のご負担をお願いいたしております」

??

「まず、こちらの電源を入れていただいて……」

それは、何とも驚くような道具だった。

電源を入れると、「日野房子様のご家族の方へ」という挨拶文が出てきた。

地中海病院の概要、理念、病院内の地図、スタッフ紹介、様々な項目があった。

『日野房子様データ』の項目をタッチする。

わけも分からず、あちこち触っていると、

<生化学データ・・・総タンパク 7.2g/dl アルブミン  
4.1g/dl ……>

いきなり、ずらっと数字が出てきた。びっくりする。

高尾さんが画面を覗いて上品に微笑みながら説明する。

「ああ、もう採血の結果が出たようですね。どこからでもご家族の方が患者様のデータを確認できるようになっています。普通は、ご家族にどこまで検査結果の開示を行うか、患者様自身の御意志を伺いするのですが、日野様の場合、意識がないご病状でいらつしやいますので、自動的に全開示に設定されております」

これで、母のデータを全て見ることができるとのさうだ。頭のCも、肺のレントゲン写真も。私が見たところで、データの意味は理解できないのだが……

『本日のスタッフ』の項目をタッチする。

クラーク Clerk・・・高尾清美 Takao Kiyomi  
 コーディネーター Coordinator・・・石黒豊 Ishi-  
 guro Yutaka  
 脳神経外科部長 Director・・・斉藤一輝 Saitoh  
 Kazuki  
 副部長 Deputy Director・・・松下文恵 Mat-  
 sushita Humie  
 医師 Sergeons・・・双葉孝雄 Futaba Tak-  
 ao、清水太一 Shimizu Taichi、加瀬譲 Kas-  
 e Jo  
 当直医 Doctors on night duty・・・枝  
 下卓 Edamoto Suguru、モハメド・トレ Muhl-  
 ammad Tore  
 看護師長 Chief Nurse・・・松島優子 Matsu-  
 hima Yuko  
 主任看護師 Assistant manager・・・北晴美  
 Kita Harumi  
 看護師（日勤） Nurses（Day）・・・水巻力 Miz-  
 umaki Chikara、市橋幸之助 Ichihashi  
 Konosuke、横山和美 Yokoyama Kazumi、  
 佃花夢 Tsukuda Kamu  
 看護師（準夜勤） Nurses（Late）・・・勝俣純 K-  
 atsumata Jun、山元千夏 Yamamoto Chi-  
 natsu、藤美鈴 Fujimisuzu  
 看護師（夜勤） Nurses（Night）・・・岡崎光子  
 Okazaki Kohko、岩崎桃子 Iwasaki Mom-  
 oko、力丸美香 Rikimaru Mika  
 薬剤師 Pharmacist・・・盛志保 Mori Shihō  
 看護助手 Medical Assistants・・・鈴木麗奈  
 Suzuki Reina、周鵬雨 Zhou Pengyui

名前をタッチすると、写真、プロフィール、あいさつ文が出てくる。

驚きだった。なるほど、患者家族とのつながりを確保する有用なツールなのだ。

そして、画面で名前の羅列を見ると、いかに多くの職員が母を支えてくれるかがよくわかる。今日、直接母に関わる職員だけでもこれだけの人数いるのである。

お金は多少かかるかも知れないが、ここへ搬送してもらって良かったと改めて思った。ここでだったらきつと母は助けてもらえるに違いない。

### 第3話 説明

次に渡されたのが、カードだった。

薄いプラスチックカードには、私の名前が入っている。

これから母はICUで治療を受けることになるので、このカードには現時点でICUの開錠機能がついているそうだ。もしも、病状が安定してきて一般病室に移ることがあつたら、その時点で、その病室だけに使えるように切り替わる。退院と同時に機能は全部無くなるので返却の必要はないとのことだ。

セキュリティ管理は万全だと言う。病室へ出入りすると、全て、オペレーショングルームのコンピュータに記録が残る。何か事件があつたら、誰に渡したカードで部屋へ侵入したか全てわかるのだそう。職員は名札にリモートコントロールの発信機がついていて、カードを使わなくてもその部屋に近づいただけでドアが開く。薬剤師、クラークや清掃業者は担当患者の部屋全部の鍵機能を持つ。医師と看護師に関しては、自分の担当以外でも全ての病室に入れるようになっていて。緊急事態にいつでも飛び込めるようにするためだ。別の見方をする、医師を含めて、全ての職員は、誰がどこの部屋にどれくらい滞在したかまで全て管理されているわけだ。

患者は、腕に取り付けられたタグに発信機が入っている。患者取り違えを防ぐ固体識別機能と共に、部屋の鍵機能を果たす。発信機の発する電波は微弱なもので、ペースメーカーに影響はないらしい。

ITを駆使した病院。驚くばかりだ。

私は、分厚い契約書の控えと『地中海姫』、それに鍵の役割をするカードを受け取って、コンシエルジュを後にした。

私が向かうのは、ICUの外にある会議室である。そこで、スタッフから話があると言う。

4階に向かう。



会議室で私を待っていたのは、医師と『コーディネーター』と言われる職種の方の説明だった。またしても、説明書の山だ。

「はじめまして。脳神経外科チームのチーフをしています斉藤と言います。我々チームでお母様の治療をさせて頂きますが、事態が緊急ですので、大急ぎでご意向を伺わなければなりません。その点、ご了承ください」

挨拶をしたのは、惚れ惚れするような二枚目医師だった。切れ長の目、鼻筋の通った涼しげな顔。反面、体つきはがっちりしていて、青の術衣がより一層斉藤医師を頼もしく見せていた。

早速、病状の説明があった。

薄いパネルのコンピュータ画面に、母の頭の3D画像が出てきた。斉藤医師は、画像を指し示しながら詳しく説明してくれた。

それは私にとって、ショッキングな内容であったが、これだけ設備の整った病院で、しかも多くの有能なスタッフが全力を尽くして治療に当たっているという安堵感が私のショックを和らげていた。

母は、小脳に巨大な出血巣があつて、救命自体がかなり難しいという話だった。延髄が圧迫されているのだそうだ。希望があれば手術をするが救命の約束はできないこと、救命できても意識が戻らない公算が強いことが説明された。開頭血腫除去術という手術の方法についてもコンピュータパネルに図が出てきて、わかりやすく説明された。

時に奇跡的な経過を辿ることもあるが、手術が必ずしもいい結果を残すとはいえない。特に、母のように重篤な場合は、通常は手術もできないレベルなのだそうだ。

斉藤医師はパネルを指し示しながら、私の顔を覗き込んだ。

「手術をした場合の救命率は10%とってください。ここまでで何かお聞きになりたいことはありますか？」

これまでの説明は、素人の私にもわかるようにポイントを押さえ

た要領のいいものであった。

ただ一つ、抜けていた説明……。

「もしも……、もしも手術を受けなかったら、どうなりますか？」

斉藤医師は一旦テーブルに視線を落とし、それから顔を上げて言った。

「恐らく……、今夜が峠かと」

「……！」

私には、手術を受けても救命率が10%しかないという説明よりも、何もしなかった場合に、母が明日まで持たないだろうという返事の方がずっとショックだった。

ここへ来て、手術を受けないという方を選択することが可能だろうか。

10%の道があるのとないのでは全く感じ方が違った。二つを比較しているうちに、私の中で10%はいつのまにか70%くらいに膨れていた。手術を受ければきつと助けてもらえるはずだ。私は、後悔しないために母をここへ搬送してもらったわけで、このまま何もせずに、じつと母の死を待つなんて考えられない。

何より、目の前の医師は誠実そうで全てを任せられる、そんな才一ラを放っていた。そう、確かテレビで見たこともあるドクターだ。そんな先生が手術をして下さるのだ。助からないはずがないではないか。

「手術を……お願いします」

私は、頭を下げていた。

助かっても意識が戻らない可能性が高いのですよ、と念を押されたが、このまま見殺しにできるはずがない。

まだ、続いた。今度は、延命処置の話だった。

手術がうまくいった場合、そのまま回復すればいいが、そうでな

い場合についても考えていてくれ、ということだった。

「つらいかもしれませんが、大事な書類になりますから、よく考えてお返事ください」

一つ一つのことを全て私が決めなければならない。どの道を通れば一番いいのか、濃い霧の中を進んでいくような心細さがあった。医学知識がない上に、斉藤医師の説明を受けても、「この道を通りなさい」という明快な道を指し示してくれるわけでもない。全ての説明は、確率論であり、結局どれもこれも『蓋を開けてみなければわからない』という答えしか得られない。

恐らく、医師自身にも、どの道が一番いいのかわからないのではなからうか。「奇跡が起こることもある」と言うから、「奇跡」が起こった場合には、間違いなく、その道がベストな道であるはずだ。しかし、滅多に起きないから「奇跡」というのである。

「決める」ということには苦痛を伴う。できるなら、誰か全部決めてほしいとさえ思ってしまう。

受付では、油断すると、いらないサービスが山のようについてきそうになった。なるほど、あったら便利だとは思ったが、私は、母の命に直接関わらないそれらのサービス一つ一つに「要らない」と返事をしてきた。しかし、今度の質問には簡単に「要らない」と言えない。

私が答えに詰まっていると、斉藤医師が微笑んで言った。

「あとは、なるべく早いうちにコーディネーターの石黒に回答をお願いします。わからないことは、彼に色々相談してください。申し訳ないが私はこれで失礼します。石黒君、お願いしますね」

そう言つと、斉藤医師は深々と頭を下げて、退席した。

母の頭の中で何が起きているのかという説明と治療の選択肢の提示、そして、延命治療の話をした後は、細かい説明はコーディネ

ーターに引き継がれた。コーディネーターは、看護師の資格を持つ。専門知識を持っているので、医療に関する相談を受けてくれる他、説明の多くがこのコーディネーターを通じて行われる。相談内容によつて、事務に関することならクラーク、医療に関することならコーディネーターが動いてくれるわけである。

## 第4話 迷い

石黒コーディネーターは、中肉中背でやや毛深い感じの人だった。眉も濃い。

彼は、黙って説明用紙をテーブルの上に綺麗に並べると、初めて口を開いた。

「コーディネーターの石黒です。さきほど斉藤医師から説明があったとおりですが、補足的に色々説明をさせていただきます」

一通り説明を聞いた。長い長い説明だった。説明用紙を大事そうに丁寧に並べる仕草、説明の仕方から、彼が真面目で、かつ見かけに反して少し神経質であることが伺われた。

私は医療内容に関する契約書たちのうち、納得できるものにサインをし、今決められないものは後回しにしてもらった。

さきほど斉藤医師から説明のあった手術の契約書だけでも4枚もあった。

その他にも、脳死と判定された場合、臓器提供の意志があるかどうかの書類（本人がドナーカード保持者であるかどうかも含めて）、研究試料として血液その他を使用可能かどうかの書類が山ほど。それから、検査データを研究発表（論文を含む）に使用していいかどうかの許可についても。

こんなものまであつて驚かされた。＞医療に不服がある場合、第三者委員会へ申し出ることができまうという書類。まずはコーディネーターが丁寧に説明をするが、それでも不審な点がある場合は、このような手続きを経て、こうして、こうして、と矢印で患者や患者家族が取ることのできる手続きの道筋が書いてある。そこには第三者委員会への連絡先も。

そして、逆、次のような条項に抵触する場合は、医療機関から

患者、患者家族へ注意、勧告、そして、場合によっては顧問弁護士を通じて法的手段に出ることもありますよ、という警告文まで。

明らかな犯罪行為を院内で行った場合には、警察に通報するが、犯罪と取れない程度のもものは、全て弁護士が動くということだ。列挙された数多くの条項に目を通した。実に細かいことまで書いてある。要約すると、医療従事者に対して『紳士的でない態度』を取った場合が該当するということらしい。あくまでも、医療従事者が「脅された」と感じるようなことがあったなら、文書で抗議文が届くらしいのだ。何だか、殺伐としている。

沢山の契約書を見ながら、私は、母をお願いしていること全てが一つ一つ細かい契約の集合体であることを思い知らされた。

「『地中海姫』をお持ちですか？」

「あ、ええ。はい」

私は、バッグからそれを取り出した。

「その中に、通信欄があります。もしも困ったことがあったり質問がある時には、そこから私共に連絡を取ることができます。ご利用ください。すぐに返事ができないこともあります、なるべく早く対応いたしますので。また、こちらから連絡をする場合もありますので、時々覗いてください」

私は、サービスが行き届いている点について、本当に感心した。しかし、だからこそ、強気にも出ることができるのかも知れない。

そして、最後に、延命処置に関する契約書が差し出された。

「これは、実は急いで提出してもらわなくてはなりません。他の書類は明日の朝で結構ですが、これは、できれば、この場で考えていただけないでしょうか。さきほど斉藤ドクターからも説明があった通り、日野様の容態はかなり深刻です。手術中にも急変の可能性はあります。また、手術がうまくいっても、今後の対応をどうするか、ご家族のご意向を伺っておかないことには方針が立ちませんから。」

返事をいただけなかった場合、我々としては、人命救助の観点から、自動的に延命処置をとらせて頂くことになります。人工呼吸器をつけたり、心臓が止まった場合には心臓マッサージをおこなったりと最後の最後まで努力することになります」

私はため息をついた。

どうすればいいのだろう。本当に……

「あの……。私、気が動転していて先ほどの説明がよく理解できていないのですが、手術がうまくいったからと言って、母が良くなるとは限らない、ということ……なんですよ」

「これから、斉藤医師チームによって血腫除去術が行われます。最も我々が望んでいるのは、それがうまく奏功してくれて、意識が回復することです。しかし、そうなる確率は、高くありません。いずれかの時点で延命処置に切り替えることが必要になる可能性の方が高いわけです。一旦そうなれば、回復は困難です。言葉を変えれば死までの時間稼ぎに過ぎない公算が強いということです」

「母が助かる可能性はほとんどない、と……」

「そうですね」

「ゼロではない、ということですよ」

「まあ、ゼロではありませんが、ゼロに近いでしょう。手術や術後の管理については全力を尽くします。時々、本当に信じられないようなことがありますからね。我々も今の段階ではまだ諦めていません。しかし、その結果については再三申し上げておりますように、どういう結果になろうとも、ご家族の方に納得して頂くしかありません。それは、救命できた場合に考えられる後遺症も含めての話です」

「呼吸器をつけた場合、どういう経過を辿りますか？」

「心臓が止まるまで着けたままになります」

「心臓が止まるまで……ですか。どのくらいの期間になりますか？」

「人によりますので何とも言えません。数時間のこともありますし、数ヶ月に及ぶこともあります。臓器提供の意志があれば、

脳死判定後、その時点で臓器移植の手続きに移る、という選択肢もあります……。ご本人はドナーカードをお持ちではなかったようですし、たとえば移植のご意志があったとしても、脳死の判定が出ないことにはやはり呼吸器をはずすことはできませんから……」

説明を聞いて、私は、ますますどうしていいのかわからなくなつた。

私は、今、ハサミを手渡されている。

母の細い細い命の糸。それをどこで切るか、さあ、切ってみなさい、と迫られている。食道の辺りに刺すような痛みが走った。膝の上に置いた手をいつの間にか強く握り締めている。そして、掌にじつとりと汗をかいているのが自分でよくわかる。

私が本当に知りたいことは実はそんなことではない。堂々巡りの質問でそれこそ時間稼ぎをしている自分。わかっているが、なかなか切り出せずにいた。しかし、それを聞かないことには返事ができない。

これまで、至れり尽くせりのサビスに感激していたのと正反対に、民間病院の残酷とも言える仕打ちを感じていた。

意を決して、聞きたくなかった質問をする。

「延命処置をお願いした場合……、あの、あの……どれくらい費用がかかりますか……」

最後の方は不自然なくらいに声が小さくなっていた。

その質問を口にした途端に私は激しい動悸がし、続いて軽いめまいを感じていた。

母の命とお金を、私は今、天秤にかけようとしている……

石黒コーディネーターは、表情一つ変えずに言った。

「私の意見を先に述べさせて頂きますね。私は、延命処置を勧めない。一つには、さつきから繰り返し述べているように、回復の可能性が小さいこと。そして、もう一つは、日野様が保険に入っておら



れないことです。残酷なことを言って申し訳ないが、無理はされない方がいい。血腫を取り除く手術を受ける、家族として、そこまでされればいいではないですか。本当ならその処置だつてする必要があるのかどうか疑問です。人工呼吸器をつけたら、管理費だけで一日10万円以上が別途かかります。その他にも入院しているだけで様々な経費がかかることは、クランクからお聞きになったと思いますが……。本当は、お金の問題は、私ではなくクランクに相談されるべきなのですが、余計なお世話ですみません。無理されているみたいで気になったものですから。一度つけたらはずせません。そのことも考えた上でお返事なさってください」

私の目からは涙がボロボロ流れてきた。

母が倒れた悲しみは、ここへ来たことで、いつの間にかオペレーターに包まれてしまっていた。多くの優秀なスタッフが全力で母の処置に当たってくれる。そういう安心感が、逆に私を深刻な状態を認識することから遠ざけていた。いや、逃げていたのかもしれない。

今、私は、たとえエリート病院である地中海病院で処置してもらっても、結局、私自身が現実と向き合わなければならぬことを思い知らされていた。どんなに設備が整っていても、どんなに優秀な人材が揃っていても、最後は、私自身が母の状態を受け入れるしかない。そして、自分で、ハサミを入れるしかないのだ。しかしそれは、私には、余りにもつらい現実だった。

「すみません。あと少しお時間を頂けませんか。ご迷惑は重々承知しています。だけど……」

石黒コーディネーターは、しばらくテーブルの一点を凝視していたが、やがて顔を上げて、私に一つの提案をしてくれた。

## 第5話 カウンセリング

「家族の心をケアするサービスがあります。最初の30分は10,000円ですが、その後からは、30分5,000円でプロが相談に乗ります。受けてみられませんか。地中海姫を開けてみて下さい。>ご家族の心のケア<の項をタッチしていただけますか？ そう、それです。臨床心理士が3名いると思いますが、それぞれのスケジュール表を見てみてください」

私は、涙を拭きながら、地中海姫を操作した。

田中、竹、新島。それぞれの顔写真をタッチすると、自己紹介と簡単なプロフィールが出てきた。さらに、スケジュールの欄をタッチする。

石黒コーディネーターが初めて笑った。

「ちょっとソレ貸してください」

ピッピッピッと画面をタッチして、私に向かって言った。

「新島心理士に予約を入れましょうか。空いてるみたいですから。彼女に相談した後で、心が落ち着いてからお返事を下さい。くれぐれも無理をなさらないように」

そういうわけで、私は、臨床心理士のカウンセリングを受けることになった。

親しい身内に突然のことが起きると、パニックに陥る方は少ないそうだ。そう聞くと、ちょっとほっとする。

カウンセリングを受けるに当たって、簡単な心理テストが施された。それをもとに、色々な話をした。新島心理士には、人をふわりと包み込むような優しい雰囲気があった。時間はあっという間にす

ぎて、結局、1時間近くが経過した。

カウンセリングを受けてはつきりわかったことが一つだけある。それは、私の今一番の問題が、母が倒れたことでショックを受けている、というレベルなんかじゃないということだ。新島心理士は丁寧に関心のケアに当たってくれたが、私は、途中から時計ばかりが気になっていた。30分を超えれば料金が15,000円に跳ね上がるからだ。

私の今一番の問題は「金銭面の問題」に他ならなかった。そんな簡単なことを理解するために、私はわざわざ15,000円もの余計なお金を使ったのだ。自分で自分がおかしかった。

石黒コーディネーターが言った通り、金銭面の相談はクラークにすべきなのだ。彼は、私を取り乱して普通じゃなかったからカウンセリングを勧めた。それは感謝すべきことなのだろうが、結果的には何も役に立たなかった。私は、そのままコンシェルジュへ行くことにした。答えを見つけるために。

エレベーターホールから目的の場所へ向かう途中、私は、どこかで見たことのある女性とすれ違った。大きなサングラスと帽子で顔半分が隠れており始めはよくわからなかった。通り過ぎたとき、ほのかに甘い香りがした。長い脚、普通ならとてもじゃないが着こなすのが難しい斬新なデザインの服がしつとり身体に合っている。

ああ、そうだ。女優の橘<sup>たちはな</sup>美理<sup>みり</sup>だ。今注目を集めている……。やっとその名前が出た時、あわてて振り返ったが、彼女の姿はもう小さくなって沢山の人影に隠れてしまっていた。

そうだ。地中海病院は、そういう病院なのだ。

コンシェルジュで私は高尾さんと呼び出してもらった。

彼女は、相変わらず、お人形さんの美しさで完璧なスマイルを作って私を迎えてくれた。

そして、また12番ブースで二人きりで話をした。

「実は、延命処置をお願いするかどうかで、私、とても迷っています。保険に入っていないので、支払いが可能なかどうか心配です。なるべく事務的に直裁に切り出した。こんなことは、はっきり喋った方がいいのだ。余計なことをぐちゃぐちゃ考えるから、おかしい事になるのである。そういう点ではカウンセリングが役に立ったのかもしれない。カウンセリングそのものがなくて、ワンクッション置いた、という意味で。」

高尾さんは、何の戸惑いもなく、流れるように答える。

「ええ。ご相談の内容はよくわかりました。まず、日野房子様のご病状を考えた上で、辿りうるコース一つ一つについて一緒に見ていきましようか」

なるほど。大雑把に、どうしよう、と思うからいけないのだ。一つ一つ分析していけばいいのか。それにしても、どんな質問、どんな相談にも澁みなく答えられるように徹底して教育されているのだろうなあ。感心するばかりだ。

高尾さんは、下を向いたかと思うと、パンフレットとバインダーを取り出して、テーブルの上に置いた。

「その前に、お支払いにつきまして、もう一度詳しくご説明をさせて頂きますね。まず、最初にも述べましたように、お支払いは10日締めで月末に請求書が行きます。」

そう言っ、綺麗な指先を、パンフレットの支払い説明図の上に置いた。その爪は桜貝色のマニキュアがつややかに光っていて、その上に目立たない程度の小さな花びらがネイルアートとして施されていた。私の目を見て、私が理解したことを確認すると、噛み砕くように説明を再開した。

「先ほどはお時間の関係で説明いたしませんでしたが、実は、毎日

の会計を地中海姫で確認することができます。会計事務の処理に、ある程度お時間がかかりますので、実際にご確認頂けるのは2日後になります。ご心配であれば、毎日でも地中海姫で2日前までのお支払い金額を確認することが可能です。そして、実際のお支払い、すなわちカードからのお引き落としは、2カ月後になりますので、請求書が届いてからお支払いまでに時間的猶予がごさいます。それはよろしいでしょうか？」

高尾さんのその説明を聞いて、私は両肩に乗っていた重荷がすっと消えていく感じがした。

私は、自宅で確認した母の通帳を思い出していた。すぐにだったら払えなくても、いざ、という時には、母の通帳からお金を引き出して私の通帳に移す時間的余裕があるわけだ。普通預金は240万円だったから、それは問題なくすぐに移せるだろう。そして、定期預金には650万円が入っている。もしも240万円で足りない場合は、一部そちらから持ち出すことも可能だ。解約手続きがどうかよくわからないが、まあ、時間があれば、解約だってそんなに難しいことはないだろう。

私は、今まで随分取り越し苦労をしてきたのではないかと、自分のこれまでのうろたえぶりがおかしくさえ感じられてきた。

私の表情を確認して、再び高尾さんは続けた。

「さきほど、日野様は、一括払いでのお支払いで契約をなさいました。あの時にも説明いたしました。分割払いにする、という方法もございますし、当月は本日一日分だけのご請求ということになりますから、来月分から分割払いに変更することも可能です」

私は、母が倒れたことで動転していて、それに、契約書があまりにも多かったのも、それに圧倒されて、頭も充分に回っていなかった。そうだ。そういう説明を確かに聞いた。何も結論を急がなくて

もいいわけだ。

「分割は、2回払いから、かなり沢山のコースを準備しています。そうですね、よく利用されるのは、3年ぐらい、すなわち36回払いのコースでしょうか。一度に支払うことができる方でも、やはり、ある程度の余裕を持っていたいとおっしゃって、多くの方が分割払いになさいます」

さらに、ニツコリ笑いながらこう付け加えた。

「芸能人も分割払いが当たり前なんですよ。一回払いが充分にできる方々ですのに、考えるのが面倒なんでしょうかね」

いかにもおかしそうに高尾さんがふふつと笑った。

そうだよな。芸能人はどうでもいいとして、費用についての問題を抱えているのは、何も私一人に限ったことではないはずだ。そうして、みんな、こうやってクランクに相談に来るのだろう。分割払いにすれば、受けたい治療を諦めなくても済む。

私は、地中海病院が一流であるわけが何となくわかった気がした。患者や患者家族のことをきめ細かく考えてくれているのだ。選択肢がそれだけ沢山、私たちのために用意されている。

## 第5話 カウンセリング（後書き）

次話は4月24日（木）に更新予定です。

## 第6話 高尾さん

私は、高尾さんのここまでの説明を聞いて、自分が悩んでいた事柄が、本当はそんなに大した問題ではないのだと思い始めていた。最初からここへ来ればよかった。

高尾さんは、私の目をみながら質問した。

「お母様のご病状ですが、チーフドクターからは、どのような説明をお受けになりましたか？」

私は、私なりに理解した内容を伝えた。

「これから、血の塊を取り除く処置をしてくださるそうです。でも、それをして、助かる可能性は10%だそうです」

高尾さんは、視線をテーブルに落として深くため息をついた。

「そうでしたか。娘さんとしては、本当におつらいですね」

「ええ、まあ。何とか生きていてくれたら、こんなに嬉しいことはないのですが、こればかりは、担当の先生方と、それから神様にお願いするしかありません」

高尾さんの表情は、マネキン人形のような硬質さを私に与えていたが、長い睫毛がマスカラでなおさら強調されて、目の動きがよくわかる。ゆっくり睫毛を上げて私の方へ向けると、彼女の潤んだ瞳が、私に同情してくれていることを効果的に伝えた。

「折角、外科手術までお受けになるのですしたら、娘さんとしては、何とか希望の光を繋ぎ止めたいですね。私が日野様の立場だったら、同じように考えると思います」

私は、嬉しかった。患者家族の立場で考えてくれる人がいる。

ここまで来て、私は、今まで心にひっかかっていた物が何であるかを理解した。



医療従事者は、人の死に慣れている。沢山の死に直接関わってきた人達だから、治療方針やアドバイスが、どうしても、「確率論」や「一般論」に終始しがちで、大事なものが抜け落ちるのだ。それは、患者や患者家族の気持ち。いくら科学的な説明をされても、患者や患者家族は、それだけで納得できるものではない。

石黒コーディネーターのアドバイスは、確かに正しいのだろう。母の病状は重くて、助けることが難しい。認めたくなくとも、それが事実だろう。けれど、延命処置を勧めない、という彼のアドバイスはどうだろう。そこには、患者家族の気持ちはない。人工呼吸器をつけることが、無駄に等しい、と、それは、医師や看護師の立場からのアドバイスなのだ。

それに比べて、事務の高尾さんは、たとえ医療機関で仕事をしていても、直接医療行為を行うわけではない。それは、言葉を変えようと、より家族に近い、別の言い方をすれば、患者家族に感情移入してくれる、ということだ。

「石黒コーディネーターは、どちらかと言うと、延命処置には否定的であつたような印象を受けました」

何の気なしに、私は私を感じたことを口にした。この言葉を聞いて、高尾さんの目が一瞬、キラツと光った。私は、まずい事を言ってしまったのではないか、本能的にそう感じた。何というのか、事務職員と医療者の間の溝……。そういうものがあるのかも知れないと、かすかな匂いのようなものを感じていた。

しかし、そう言う目で高尾さんを見ると、彼女はすでに、先ほどと露ほども違わぬ雰囲気を取り戻していて、私の感じた一瞬の違和感が、単なる私の思い過ごしであつたと思えてきた。

「一時的に呼吸ができなくなつて人工呼吸器をつけられる患者様は、回復して元気になれる方と、残念ながら、短期間のうちに命を落としてしまわれる方とおられます。それは、本当に、先ほど日

野様がおっしゃったように、神のみぞ知る世界ですからね。私がどうこうアドバイスできるものではないのですが……」

その通りだ。人工呼吸器をつけても、それは自己満足で終わってしまう確率が高い。でも、人工呼吸器をつけない、ということは、最初から可能性を捨てる、ということになる。

「高尾さん。高尾さんだったら、どうされますか？」

私は、目の前の高尾さんに聞いてみた。無意味な質問かもしれないが、何か小さなヒントのようなものでもいいからほしかった。それほど私は迷っていた。

「私でしたら……。そうですね、悩む所ですけど、後悔することは避けたいと思いますから、お願いするような気がします。後で苦しむのはイヤですものね」

彼女の返事は、誠実な答えだと思った。絶対につける、とは言わなかった。それは彼女の本心であることを強く印象づける申し分のない答えだった。

彼女にこのような質問をすることに意味がないことはわかっていた。それでも、彼女の答えは、最終的に決めかねていた私の結論を後押しするのに充分だった。

「ありがとうございます」

私は頭を下げた。

「お役に立てたかどうかわかりませんが、どうぞ、お気をしっかりと持たれてくださいね。どんな些細なことでもいいですから、また、悩み事があったらいつでもいらして下さい。日野様のお役に立てるよう、精一杯努力いたしますから」

こんなに綺麗で、それでいて、こんなに優しい人が受付にいる。地中海病院のすばらしさを私は見せ付けられた気がした。テレビで持ち上げられるだけのことはある。

ブースを退出し、コンシェルジュを後にすると、私は急いで4階に向かった。思わぬ時間を食ってしまった。急がなくなっちゃ。

## 第6話 高尾さん（後書き）

次話は4月28日（月）の投稿予定です。

## 第7話 監視

4階のICU前には、会議室の他に複数の家族控え室があった。私は『Vacant<sup>vacant</sup>』の表示のある部屋を探し、そのドア横にあるカードリーダーにカードを通して、中へ入った。ホテルの一室のような作りになっている。時間当たり2,000円で使用可能だ。ベッドとデスク、ロッカーがあつて、家族が看病に疲れた時などに利用できるようになっていた。

私はベッドに腰掛けて、そのままゴロンと横になった。目の前にあるデスクの脚を見つめながら、一つ大きく深呼吸する。いわゆるネコ脚と言われる、クラシクな作りの脚をした洒落た小さなデスクだった。何だか疲れた。このまま寝てしまいたい衝動に駆られる。

「よし！」

誰に言うともなく自分で気合いを入れると、私はベッドから起き上がり、足元に置いたバッグを引き寄せた。

大量の契約書をベッドの上に出す。

一番上にある『延命処置に関する契約書』を手にとって、私は、ネコ脚デスクの前に座った。

それには、心臓が止まった場合の処置についての説明と呼吸ができなくなった場合の説明が書かれていた。人工呼吸器の装着については、次のようなことが書かれていた。

人工呼吸器をつけることで必ずしも患者さんが回復するわけではないこと、人工呼吸器の設定がうまく行っているかどうかを確認するために、定期的に検査が必要であり、それは、患者さんの容態によつて医師が随時判断すること（患者家族に検査を拒否する権利がないこと）、人工呼吸器は医療従事者以外触れてはいけないこと、回復の見込みがない場合でも一度つけた人工呼吸器をはずすことはできないこと、などなど、沢山の文章が箇条書きでびっしりと書き

込まれていた。どれもこれも、私に言わせれば、当たり前のことだらけだったが、こうして文章にすることに意味があるのだろう。患者家族をバカにするな、と怒ってはいけけない。形式上のことなのだから。

一度つけた人工呼吸器ははずすことができない……か。

高尾さんは、言っていた。回復して元気になる人と、短期間で命を落としてしまう人がいる……

私は一人で笑った。バカみたいに何を悩んでいるのだろう。

たかが契約書一枚に、どれほど私は時間と労力を費やしているのだろうか。

やれることをやる。それでいいではないか。手術をしてもらってその後一時的に呼吸抑制が来ても、人工呼吸器の力を借りて一時的のぎをすれば、うまく行けば回復してくれるかもしれないのだ。わずかな可能性であっても、ここでそれを捨ててしまう理由なんかないはずだ。

私は、”延命処置を希望します”の欄と、”上記の内容を遵守します”の欄に力強くレ点をつけ、自分の名前をサインした。ベッドに移って、他の契約書をぺらぺらめくってみた。

人工呼吸器の契約書を提出したら、今度は、これらの契約書を作成しなくちゃ。

あんまりグズグズするわけにはいかないのだ。

私は、ICU入口で石黒さんをお願いした。彼は、すぐにやってきた。少し微笑みながら……。

「決心なさいましたか」

近づいたと同時に石黒さんはそう言った。

「はい。どうもすみません。遅くなりました。残りの契約書は今から急いで書きますので……」

『延命処置に関する契約書』を石黒さんに手渡しながら、緊張気味

に喋った。ふつと見ると、石黒さんの表情から微笑みが消えている。しばらく沈黙が続いた。目玉があちこちに動き、口を変な形に結んでから何かを言いかけた石黒さんだったが、再び口をつぐんでから、ようやく短く言った。

「確かにお願いが致しました」

彼の一連の動きは、私が彼の予想を裏切る返答をしたことを如実に物語っていた。

しかし、最終的な決定権は患者家族にあるわけで、そのための契約書なのだ。

そうして、私は、私が占領している家族控え室に戻った。沢山あの中のとった一枚の契約書を提出しただけで、私は相当に疲れてしまったことを意識した。残りの契約書のサインという仕事はまだ残っている。

ベッドの上にゴロンとなる。母が倒れてから、あつという間にいろんなことが起きた。私には初めてのことばかりで、何と云うのか私の気持ちに宙に浮いたまま事務的に物事が勝手に進行していく、そんな感じがしていた。母は命の危機に瀕している。そんな大変な状況なのに、膨大な契約書のサインという、やるべき事柄に忙殺されて現状を認識する暇がない、と云えばいいのか……。自分でも不思議なのだ。助かる見込みが10%、どう考えても普通の状況じゃないのに、契約書を作成するのに必要な理性が、総動員で私の感情を押さえ込んでいるのかもしれない。母が死ぬかもしれない、それは、全く現実味を帯びていなくて、悪い冗談ぐらいにしか思えないのだ。

家族控え室の天井には、丸い形の蛍光灯が二つ埋め込まれていた。白い天井と白い蛍光灯をぼんやり眺めながら、私は意識が次第に薄れていくのを感じていた。

電話の音で目が覚めた。

知らないうちに寝てしまっていたようだ。ほんの10分程度の仮眠だった。

部屋に電話……。誰から？

「日野様ですね。高尾ですけれど、おくつろぎの所どうもすみません」

電話の主は、クラークの高尾さんだった。

どうして私がここにすることがわかったのだろうか？

まるで見られているかのような言葉、おくつろぎの所……

起きたばかりの頭に謎がグルグルと駆け巡って返答に窮していた。「日野房子様の手術の準備が整いましたので、ご連絡さしあげました。地中海姫でお知らせしても良かったのですが、家族控え室7番に日野様の入室が確認できておりますので、直接お話した方が良いと思いましたので……」

ああ。そういうことが。

鍵機能のついたこのカード。何もかも把握されているということか。

私の返事がすぐになかったことで、高尾さんは言い訳じみた解説までしている。まるで、私の表情が見えているみたいだ。

「わざわざ、ありがとうございます」

私は、お礼を言った。

「あ、いいえ。患者様は、もうオペ室へ向かわれました。しばらくご面会になれませんので。手術が終了しましたら地中海姫で連絡が入るようになっております」

電話を置いて、ふと見ると、部屋の奥の天井近くに小さな監視カメラが設置されているのに気がついた。

私は何だかおかしくなつて声をあげて笑った。何のことはない。見られていたのだ。

職員の勤務状況をすべて把握しているだけじゃない。患者家族も全て、常に監視されているのだ。なるほど、セキュリティ対策が万全



なわけだ。すべてを『疑い』の目で見ていて、すべてがすつぽんぽん。安全を買う、ということは、実はトランプの裏表。表から見るか裏から見るかでこんなに感じ方が違うのだ。私は地中海病院という組織に、何か不気味な物を感じ始めていた。

日本の医療はもはや信頼の上には成り立っていないということなのだろう。

不審な点があったら、第三者委員会に申し出ればいい、その代わり、こちらにも、言いたいことは言わせてもらうよ。全ての記録を取らせてもらうよ。患者家族の行動も逐一拝見させてもらうよ。地中海病院が患者や患者家族にそう言い放っている。そんな風を感じる私は被害者意識が強いのだろうか。

机の上に平積みになっている分厚い契約書が、何だかどうでもいいものに見える。

## 第7話 監視（後書き）

次話は5月1日（木）更新予定です。

## 第8話 自宅

私は一度自宅に帰ることにした。どっちみち母には会えないのだ。手術がうまくいったとして、すぐに退院はできるはずがない。長期戦になることを見込んで、それなりの準備をしなければならない。それに、いつまでもここに居れば、時間当たり2,000円ずつお金が減っていく。監視カメラも気持ちのいいものではないし。自宅が病院から近くて本当に良かった。

病院内には家族用の宿泊施設まで用意してある。遠方からの患者家族だけでなく、治療途中の患者さんがそちらへ移ることも珍しくないと言う。一泊15,000円から準備されていて、入院しているよりずっと安くつくからだ。うまいこと考えたものだ。周囲の宿泊施設より少々高くても、患者はこちらを選ぶ。同じ敷地内にあるから治療途中の人たちにとっては何となく安心というわけだ。

地中海病院の敷地は、面白い構造になっていた。建物に囲まれて地中海池がある。この病院のシンボルらしいが、以前は、池の近くにバラ園とかハーブ園があつて、もう少しゆつたりしていたみたいだ。それが、建物が増えたために、池だけがポツンと残って、少しおかしい具合になっている。現在、バラ園とハーブ園は、病院の屋上に移されていて、入院患者の憩いの場になっているようだ。地中海姫の案内でその綺麗な風景を見ることができる。

退室のボタンを押して、私は、部屋を出た。

コンシエルジュの前を通って、正面玄関から外へ出る。玄関には2名の警備員が立っていた。

地下鉄で家に向かっていた時、急に思いついて私は途中下車した。神社が近くにあるのだ。いつもならお賽銭も入れないところだけど、500円玉を投げ入れて、そして、お守りも買った。500円玉で

母が助かるのならこんなに簡単なことは無いけれど、今の私にできることはこれくらいしかない。やれることは何でもやっておきたかった。

母のいない自宅は、ガランとしていた。台所には濡れたバスタオルが床にそのままになっていて、つくりかけの昼食の材料がまな板の上に、そして、大きなキャベツが調理台の上にゴロンと転がっていた。母が倒れた光景が蘇ってくる。ついさっきまで、ここで、二人でお喋りをしていたのだ。ドラマの途中でコマーシャルが突然入って、ぶちつと途切れたみたいなの、そんな感じだった。だけど、ドラマが中断した所から再開されることはない。残念ながら、新たなドラマが始まってしまったのだ。それも、悲しいドラマが。

台所を大急ぎで片付けた後、私は自分の部屋に入ってコンピュータの電源を入れた。午前中に仕上げた翻訳を送信していなかった。もう一度間違いがないかどうかを確認して、送信する。

それから私はメールをチェックした。4件の新たな翻訳依頼。特定保険用食品の許認可資料の翻訳が一件、これは3時間あればできそう。化粧品原料に関する報告書が一件。データが中心になるので、ページ数は多いがそんなに大変ではない。あとは、コンサルティング会社が作成したマーケティング資料が一件。ここは前回にも私を指名してきた会社だ。そして、新規の依頼が一件。保存容器をインドの会社と共同開発するという会社からのものだ。ちよつと変わった容器のようで面白そう。

私は、悩んだ。母が倒れていなければ、悩むことなく全部を引き受けていただろう。けれど、そのことで、どの程度時間的に制約を受けるか判断ができない。なるべく母のための時間は確保しておきたいと思うが、そのためには仕事を減らすしかない。でも、逆に少しでも治療費の足しになるよう、その分余計に仕事をしたい気持ちもあった。

最初の3件は、それほど負担にならないが、新しい会社からの依頼……。契約書類一式と会社概要等さらには保存容器についての資料。ページ数もとても多いし、新たに勉強する時間が必要になる。けれど、こういう大きい仕事を確保しておけば、次の仕事につなげることができる。最初にいい仕事をする、大抵は、私を指名して仕事を依頼してくるからだ。3件の返事をして、4件目は保留にした。今夜にでも返事をしよう。やりかけの翻訳とこれから手をつける翻訳を合わせて今5件抱えている。小さな仕事は今日中に2件仕上げるつもりでいたが、それは難しくなりそう。でも、1件だけでも仕上げておきたい。

私は、洗濯機を回し、お茶漬けをざざつと胃袋に押し込んだ。やるべきことは本当に沢山あった。母のことは、今は、神様に御願ひするしかない。助かることを信じて、目の前にある「とりあえず」私がやるべきこと、それらを一つ一つ片付けていくしかないのだ。会社勤めなら有給休暇をとることもできるだろう。しかし、私の場合、仕事をしなければ、1円も入ってこない。そして、一度仕事を減らしてしまうと、翻訳会社からの評価が下がってしまって、なかなか元に戻せなくなる。特に、母の治療費が実際いくらになるのか、はつきりとわからない今、安易に仕事を減らすことはできれば避けたかった。

洗濯が終わるまでの間、私は仕事に没頭した。母がそこにいた時と同じように、パソコンに向かって。

洗濯が終わった合図が聞こえてきた。いつまでも鳴り止まないアラームに思わず私は「かあさん」と呼んだ。呼んだ後で、しまったと思った。翻訳に没頭していてつい油断してしまったのだ。私の声は誰もいない廊下を走っていつ、そのまま静寂を連れて引き返してきた。深い孤独の湖に放り投げられたことをイヤでも思い知らされた。覚悟をして玄関を開けた時には堪えられたのだ。けれど私

の隙について侵入してくる孤独には私は余りにも無力だった。アラームが自動停止すると一気に静けさがそこいらじゅうを支配して、物音一つしない室内には遠く車の走る音だけがやっと聞き取れる程度の音量で響き渡った。

あふれ出る涙を拭いて、私は洗濯物を干すために立ち上がった。バスタオルを一枚干す間にも何度涙を拭いただろう。今、泣くわけにはいかないのに。母は手術台の上で頑張っているのだ。

洗濯物を干し終えて、再び、翻訳の続きを始めた。なるべく母のことは頭から排除するようにして目の前の仕事に専念する。あつという間に2時間が経過した。

今日提出予定だった翻訳を一つ、半分ほど終えたところで、私は一息入れた。母の手術のことが気になって、かばんから地中海姫を取り出してみると、小さなオレンジ色の光が点滅していた。それは病院から新しい連絡が通信欄にきていることを示す点滅だった。

## 第8話 自宅（後書き）

次話は5月7日（水）の更新予定です。

## 第9話 ICU

あわてて、地中海姫を開けて通信欄を確認する。石黒さんから連絡が入っていた。

「手術が無事終わりました。ICUでお会いになれます。石黒」  
短い連絡だった。

……手術が無事に終わった。

緊張で息をするのも忘れていた。連絡を読み終わってようやく私は深呼吸をした。

喜びはじわつとやってきた。詳細はわからないが、無事に手術が終わったのだ。助かった。母がここへ戻ってくるのも夢じゃないかあさん……

私の口から零れ落ちたつぶやきは、今度は私の身体を暖かくした。

私は大急ぎで契約書の残りを取り出した。

悩ましい内容のものもあったが、なるべく詳細を考えないようにして、全ての書類にさつさと印をつけてサインをしてバッグに突っ込む。

さすが、地中海病院だ。公立病院だったら、母は助からなかっただろう。自分の判断が正しかったことを今更ながら感じていた。1秒でも早く母の姿を確認したくて、私は、玄関を飛び出した。外はもう暗くなっていた。

地下鉄のホームには会社帰りのサラリーマンに混じって5〜6歳くらいの子供の笑い声が軽やかに響いていた。人間の温もりを感じるホームだった。さつき、ここに降り立った時は寒々しいほどに乾いた場所だったのに。

詳細が書かれていないことに対して、多少の不安はあったが、なるべく考えないように努めた。石黒さんも忙しいのだ、詳しく書き



込むほど暇じゃないはず。何にせよ、ICUで会えるのだ。9割の喜びと1割の不安を抱えて私は地下鉄車両に乗り込んだ。

カードをカードリーダーに差し込んで、私はICUの扉を開けた。ステンレスの分厚い扉。スーツと軽やかに開く。エアシヤワーを通じて、用意されているディスプレイのウェアとキャップを身につける。

さらにICUと準備室とを隔てているもう一つの扉は、カードを差す必要もなく、やはりスーツと開いた。

ICUには、鳥のさえずりとゆったりとした音楽が流れていた。時々アラームが鳴って看護師達の動きも迅速であるが、不思議とICUにしては柔らかな雰囲気である。それは、スタッフの数が充分確保されていることも一つの大きな理由だろう。看護師の表情に余裕が見られるのだ。

こんな中で目覚めたら、母は野原かどこかで居眠りでもしていたと勘違いするかもしれない。

石黒さんはすでに帰宅していた。担当看護師に挨拶をする。

「手術がうまく済んでよかったですね。手術後まもなく自発呼吸が認められましたので、呼吸器ははずしています。管は入ったままになっていますが、ご自分の力で呼吸をされているのですよ。今のところ意識はまだ戻っていませんが、あとは日野様の生命力を信じるしかありませんね。何でも気づいたことがあったら仰ってください」

母は、手術前と変わらない様子で眠っていた。頭の手術というからフランケンシュタインのような様子になっているのかと思ったが、髪の毛もあるし、言われなければ手術を受けたようにも見えない。口には管が差し込まれていたが、それ以外は母そのものだった。

私は母の手を私の頬に当てて泣いた。まだ、目を覚まさないよう

だが、少なくとも命は助かったのだ。ベッドの傍らに腰掛けて私は話しかけた。急に倒れてびっくりしたこと、心細かったこと、翻訳の仕事を途中までしてきたこと、そうして話していくうちに、一緒に登山をしたときのことを思い出して、山の上から見た景色に二人して感動したことなど、おおよその場に関係ない話まで飛び出してきた。

「母さん、頑張ったね。今日は母さん特製の親子丼を食べ損ねちゃったから、また、作ってよ」

そう話しかけた時、母の胸が大きく動いた。

「母さん！！　ねえ、母さん！！」

思わず私は立ち上がった。椅子のズズツという音が響いた。もしかしたら、私の声が聞こえているのかも知れない。

私は興奮した。

「母さん、母さん！！」

看護師が私の方を振り返った。

自分の声が大きすぎたことに気づいて、私は声を落としてまた呼びかけた。

「ねえ、かあさん、かあさん……。聞こえてるんでしょう？　ねえ、かあさん……」

母の顔のまん前まで近づいて、私は少しの変化でも見逃すまいと閉じられたままの瞼や頬の辺りを見つめた。

しかし、どんなに見つめても、あれつきり、何の変化も認められなかった。母は目を閉じたままで私の期待に応えてくれない。

それでも、私の中に確信に近い思いが溢れていた。

何も焦る必要はない。母はきっと回復する。さっきの動きだって気のせいなんかじゃない。確かに大きく動いたのだ。神様は私たち親子を見捨ててなんかいなかった。もうしばらく待てばきっと目を覚ます。そう、必ず目を覚ますに違いない。

母が倒れてから初めて私は幸福感に包まれていた。10%の可能性。何のことはない。やっぱり奇跡は起きるのだ。私はおかしくなった。母が選ばれた10%であることがおかしいのか、それとも、その奇跡にわずかでも疑念を抱いていた自分自身がおかしいのかよくわからなかった。こうなるように地中海病院に導かれてきたのだ。母が目覚ますことを想像するうち、私は、病院を退院する時のことを考えておいた方がいいと思い当たった。斉藤先生と石黒コーディネーターにどんな風にお礼を言おうか。そうだ、何か気の利いた物でも準備しておいた方がいいだろうか。お菓子とかでいいかな。そう言えば、高尾さんにも。

先ほどとは違う看護師が記録に来た。

体温計を母の脇に挟み、モニターの確認をして、小さな機械にちょこちょこつと記入している。ここは何でもIT機器なんだな。

手術が無事に済んだことで私は少しハイテンションになっていた。

「こんにちわ。母のこと、よろしく願います」

看護師に話しかける。

「こんにちわ。山元です。今晚夜中まで担当させて頂きます。何か変化があったら『姫』でお知らせしますね。今の所、意識はまだ戻っておられないようですが……」

「あ、でも、さっき、胸が大きく動いたんですよ。多分、私の声、聞こえてると思うんです」

私は重大な変化を告げたつもりだった。けれども……

山元看護師は、私の言葉に別に驚いた風もなく、私の目を見て一瞬微笑んだだけだった。あとは、何事もなかったかのように母の脇から体温計を取り出すとそれを見て機械に記入する。私の報告は何の意味も有していないかのようにだった。空っぽになった点滴を差し替えている山元看護師に、もう一度、私の声に母が反応したことを説明しようかと思っただが、あまりしつこいのもどうかと思って止めた。まあ、いい。また、きっと動くから。今度は目をぱっちり開け

るかもしれないし。

## 第9話 ICU（後書き）

次話は5月10日（土）更新予定です。

## 第10話 思い

私は1時間半ほどICUにいた。表立ってほとんど変化はなかったが、母が確かに私の声を聞いているという自信があった。目を覚ますのは時間の問題だ。家に帰って仕事の続きをしようかと思う度に、もしかしたら私がICUを去ってすぐに目を覚ますかもしれない、そう思うと一度椅子から離れたお尻をどうしても下ろしてしまう。何度かそういうことを繰り返して、ようやく私は決心して立ち上がった。母が目を覚ませば、地中海姫で連絡が入るはず。ここは一旦帰った方がいい。

もしも母の目が覚めたら、おにぎりでも食べてくれるだろうか。果物でもいい。こんな点滴ばかりで母も、少しウンザリしているだろうから。だったら、家に帰って明日持って来れるように準備しておく方がいいかもしれない。

私は、自宅に帰る旨を山元看護師に伝えた。

「母のこと、よろしくお願いします。あの……意識が戻ったら、おにぎりとか持ってきてもいいですか？」

山元看護師は、少し困ったような顔をした。

「意識が戻られて、嚥下がきちんとできることが確認できたら、トロミ食から徐々に硬いものに変更していきます。いきなりおにぎりは無理ですよ。それに……、いえ、そうですね……、もし意識が戻られたら、また、コーディネーターから説明があると思いますよ。明日も石黒は出勤しますから、質問があれば彼に何でもお聞きになってください。複数の者が説明をして内容に微妙な食い違いが発生するといけませんから、基本的にご家族との窓口はコーディネーターということになっています。小さな質問には私でも答えられますが……」

「ごめんなさい。そうでしたか」

本当にここの仕事は細分化されているんだな。でも、ようやく私

も地中海病院独特のシステムを理解してきていた。高度な医療を提供しなければならぬのだ。その方が効率がいいに違いない。最初は正直言つて戸惑うことも多々あつたけれど、私は何でも好意的に受け止めることにした。私の捉え方がこうも変化するのは、母の手術がうまく行ったことと関係があるのかもしれない。なかった。

山元看護師は、「何か変化があれば」姫「でお知らせしますね」

近くのカレー屋に寄つて、私はその日の夕食を済ませた。自宅に帰つたらすぐに翻訳の続きをやりたかつた。明日は意識の戻つた母の世話をするのだ。そうになると、少なくとも今日仕上げるはずだつた二つの翻訳は終えておかなくてはならない。新たな翻訳も三つ引き受けちゃつたし。カレーを待つてゐる間も氣になつて私はカバンの中の”姫”を覗いてみた。残念ながらオレンジ色の点滅はなかつた。食べ終わつてもう一度確かめたが、やっぱり結果は同じだつた。カレー屋を出ると、細い雨が降るともなく降つていた。風が吹くと、霧吹きで吹き付けられるように顔面に冷たい感触が生じる。私は地下鉄の入口を見つけてそこへ向かつた。

自宅に着いたのは１１時を少し回っていた。本当に忙しい一日だった。気分の上がり下がりも激しかったし、実際にやるべきことが多かった。母が倒れたのがもう一ヶ月も前のような気がする。長い長い一日。それでもまだ、私にはやるべきことが残っていた。

自室に入り、コンピュータを立ち上げる。あと二つ、翻訳を仕上げなくては……。やりかけの仕事を始めて30分もすると激しい眠気が襲ってきた。ふっと気がついて画面を見ると、そこには……

$$\begin{array}{cc} t & t \\ t & t \\ t & t \\ t & t \\ t & t \\ t & t \\ t & t \\ \vdots & t \\ \vdots & t \\ \vdots & t \\ & t \\ & t \\ & t \end{array}$$

無数の　　が並んでいる。指を置いたまま、一瞬寝てしまったらしい。私は、うんざりするような　　の行列を消してから、コ

ンピュータの電源を落とした。これ以上は無理だ。少し休もう。母の手術が無事終わったことでほっとしたのだと思う。目覚まし時計を朝の4時にセットして私はベッドに潜り込んだ。

翌日、朝4時。目覚ましの音に眠たい目をこする。バッグから”姫”を取り出す。オレンジ色の点滅はない。意識はまだ戻っていないのか……。私は大きいため息をついた。もしかしたら、看護師が連絡するのを忘れただけかもしれない。昨晚特に忙しかったとかで……。

そうだ。データの欄があった。あそこに何か新しいデータが入っているかもしれない。私は”姫”をあれこれいじって、母の新しい情報がないかを探した。

<看護記録>の欄があった。

0時5分 体温37.0 血圧140/80 あとは何やら分からないデータが沢山書き込まれていた。そして、看護師さんの短い言葉。著変なし。

0時25分 ……

昨晚だけでも記録は膨大な量になっていた。けれども、その中に私を喜ばせるような痕跡を見つけることはできなかった。

下線の入ったデータをタッチすると、画面が入れ替わって、時系列でのグラフが現れてきた。ふーん。すごいね。

<本日のスタッフ>を確認する。看護師の顔ぶれが入れ替わっていたが、クラーク、コーディネーターは高尾さんと石黒さんのままだった。

コンピュータの電源を入れてから画面が立ち上がるまでの時間を利用してインスタントコーヒーを入れる。窓を開けると涼しい風が入ってきた。残暑が厳しいとは言え、朝晩は秋らしくなってきた。

昨日終える予定だった翻訳をようやく仕上げた時には、すでに10時を過ぎていた。7時ぐらいに休憩がてらコンビニまで食パンを



買いに行き、トーストと牛乳という簡単な朝食を済ませたが、それ以外はコンピュータの前に座りっぱなしだ。

『姫』はいつも傍らにおいて、時々点滅がないか横目で見ながら仕事をする。結局仕事を終えるまで『姫』はピカリともしなかった。二つのレポートを送信して私はコンピュータを閉じた。

大急ぎでICUへ来てみたが、母の様子は昨日と何ら変わらなかった。丁度、水色のトレーナーを着た人が母の手足を動かしているところだった。リハビリテーションなのだそうだ。脳卒中の場合、リハビリは早く始める方が後遺症が少なくて済むという。そう言えば、そういう契約書があった。でも、こんな風に意識が戻る前から身体を動かすのだ。驚きだ。母の回復に向けて着々と準備がなされているのだ。その様子を見ながら、今日にでも意識が戻ってくれることを感じていた。本当は自分でリハビリの契約をしているのだから、そんな風を感じるのはちょっと違うのかも知れないが。

「まだ、病状が不安定な時期ですので、関節を動かしたりと軽い動きだけにしておきました」

担当の人はそう言って、機械に記録をすると出て行った。

「かあさん、来たよ。沙希だよ。昨日、お守り買ったの。ここにぶら下げておくれ。良かったね、かあさん、みんなかあさんのために一生懸命頑張ってくれているよ」

母に話しかけて私はベッドの端にお守りを下げた。ちょうどその時、石黒さんが入って来た。看護師が連絡を入れてくれたようだった。

私はお辞儀をした。

「本当にありがとうございます。感謝してもしきれません」

石黒さんは硬い表情のまま返事をした。

「勝負はこれからですね。今の所、何とも言えませんが、厳しい結果になることも頭の片隅に入れておいてください」

どうして、医療従事者は悪いことをこんなにも強調するのだろう。

石黒さんの返事に少し幻滅しながらも、職業柄、否定的なことを言わなければならぬのだろつと解釈した。

「昨日、夜ここへ来たときに、私の言葉に反応して母の胸が大きく動いたんです」

私は、少しでも明るい言葉を石黒さんから引き出したかった。じつと石黒さんの目をみつめる。

「そうですか」

それだけ？ 私の予想を裏切る彼の返答に少しだけ動揺している私が出た。

## 第10話 思い（後書き）

次話は、5月15日（木）更新予定です。

## 第11話 歯車（前書き）

ダークと言うよりも、ヘビーな展開になっていきます。気が向かない方は、この辺りで引き返してください。

## 第11話 齒車

結局、手術から丸一日経つというのに、母の意識は戻らない。今日は昼前に斉藤医師から昨日の手術についての報告もあった。心配していたトラブルもなく無事に済んだことが説明された。必要があれば映像を収めたメモリーディスクを貸し出します、と言われて驚いた。地中海姫で見ることが出来るという。テレビに接続すれば大きな画像で見れますと説明されたが、実際にそういう映像を『見たい』という人が存在するのだろうか。肉親の頭の骨を開ける場面が映っているのである、私などは想像しただけで卒倒しそうだ。

手術がうまく行ったことと回復することは別の問題だそうだから、これから本当にどうなるのか分からない。

昨日は母が回復することに絶対の自信があった私だったが、まるでその気配さえない状態に次第に不安が混じってきた。もしもこのまま意識が戻らなかつたら……。いけない、そんな事考えちゃ。私が信じなくて誰が母を助けてくれるだろうか。私はつとめて話しかけるようにした。何らかの刺激になるかもしれないし、私の心の安定剤でもあった。

私は、小一時間ICUで過ごした後、自宅へ戻って仕事の続きに取り掛かった。少しでも遅れを取り戻しておかなくては……。

休憩の度に”姫”を確認するが、連絡は入っていない。確認する間隔も少しずつ長くなってきた。昨日はあんなに頻繁に見ていたのに、今日は気づくと4時間も経っていたりした。

自宅に一人していると結構雑用がある。時には何だか知らない団体の勧誘が来たり、掃除、洗濯、買い物……。これまで母がやってくれていた家事の一つ一つ、そんなに大したことではなくてもやることの項目が増えると、結構な時間を食ってしまう。そして病院へも

顔を出す。気がつくと私が仕事に費やすことのできる時間は明らかに半分以下になっていた。ため息が出る。仕事を少し減らすしかない。

そこまで考えて、私は重要なことを思い出した。頼まれていた翻訳の返事を一つ保留にしていたのだ。残念だけどあれは断ろう。仕方がない。あわててメールを開く。

翻訳会社から新着のメールが届いていた。

新しい仕事の依頼が1件と午前中に送った翻訳を確かに受け取ったという内容のものだった。そして、最後にあった文章は私を慌てさせた。

『日野さんにはいつも迅速な返事と質の高い仕事をしてもらって感謝しています。お客様からも日野さんのレポートには高い評価を頂いています。ところで、昨日は何かの手違いだったのでしょうか、日野さんにはめずらしく、No. CN - 3049954の翻訳の件、お返事を頂戴しておりませんでした。新規の会社ですし社としてもここは是非日野さんをお願いしたいと思って昨日メールを差し上げたのですが……。先方も急いでおられます。これから別の会員にお願いするのはちょっと困難ですので、引き受けてくださったものとして処理いたしました。依頼されている翻訳書類を添付しておきます。もしもどうしても無理である場合には至急お電話で連絡を下さい。これからもうかい仕事をしてください。期待しています。』

高橋

どうしようか……。電話をかけて断った方がいいだろうか。メールをもらった時刻が午後1時少し前、そして、今、7時を過ぎている。電話をするには遅すぎる……。確かにこれまで私が仕事の返事を一日放置していたことは一度もなかった。今回はすでに2日が過ぎようとしているのだ。もしも4件とも返事をしていなかったなら、

自動的に次の人に仕事の打診が行っていたらう。ところが、4件のうち3件の返事を入れたことで、会社は私の手違いと思ったようだ。会社に迷惑をかけていることをその文章から感じる事ができた。大きいため息をつく。この仕事までは何とか頑張ろう……。返事が遅れたことの謝罪と引き受ける旨のメールを送信したが、正直言って、気が重かった。

こうして少しずつ私の中の歯車が狂い始めてきた。

この頃は、まだ、自分で自覚していなかったのだが、実際に、病院通いと仕事と家事と、3つを同時にこなしていくのは相当の負担になっていた。

3日目。

とうとう昨日は母の意識が戻らないまま終わってしまった。私の中に焦りが出てきた。いつになったら意識が戻るのだろう……。ネガティブな思考が始まるたびに、弱気になっている自分自身を叱る。しかし、母のことだけでなく、仕事の方も追いかけられる圧迫感を感じ始めていた。

昨日は2時間しか眠れなかった。とにかく、仕事が追いつかない。今は睡眠時間を削って当座をしのぐしかないのだ。

ところが、今朝、翻訳会社から受け取ったメール、昨日、夜中に送信したレポートに『3ページ翻訳が抜け落ちている』という指摘があった。余計に気分が落ち込む。こんな基本的なミスをするなんて……。集中力が落ちている何よりの証拠。

普段、翻訳は大変と口では言いつつも、少なくとも30%くらいは『楽しい』という感覚が私にはある。時には、面白くて仕方のないレポートだってある。斬新なアイデア、私の知らなかった様々な科学の世界、会社や個人が必死になって取り組んでいる仕事、そういう宝物を日本に紹介する前に、あるいは世界に発信する前に、真

っ先に知ることができる特権。勿論、興奮するような内容は滅多にはないが、どのレポートも何かしら面白い要素を含んでいる。産業翻訳という仕事は、大変な割に報酬は決して多くはない。でも、この、知らない世界を覗くという楽しみがあるから続けていけるのだと思っっている。けれど、母が倒れてから、仕事そのものを楽しむという心の余裕は、すでに消えていた。今あるのは、追いかけられる感覚。仕事を追いかけるのではなく、仕事から追いかけられている感覚だけだった。

母のことが気になりながら、結局午前中いっぱいコンピュータの前に座っていた。肩と腰が痛くなって、私は、ベッドに横になった。天井を見ながら、ため息と、そして涙が出てくる。これから一体どうなるのか……。母は本当に元に戻るのだろうか。もしも意識が回復しなかったら……。そこまで考えて、私は重要なことに気づいた。

3日目だ！

私はガバと起き上がった。とりあえず9月分の支払額を確認しておかなくては。母が搬送された9月10日の支払額の計算が終わっているはず。

大急ぎで地中海姫を取り出す。しかし、支払額を確認するところではなかった。取り出した地中海姫にはオレンジ色の点滅が光っていた。新しい連絡！ 母さんの意識が戻ったんだ！ 待ちに待った母さんの意識が！ 私は興奮で心が震えた。”姫”を操作するものもどかしく、あわてて通信欄を開こうとしたその時、私の携帯電話が鳴った。





## 第11話 歯車（後書き）

次話は5月19日（月）更新予定です。

## 第12話 人工呼吸器

電話は石黒さんからだった。

「さきほど、地中海姫でもお知らせしたのですが……」

携帯を持つ手にぎゅっと力が入る。早く言つて、早く……

「実は、お母様の呼吸状態が悪くなられて……」

意識が回復したのではなく、逆の知らせ……。母の意識が回復したのだとばかり思い込んでいたので、石黒さんが何を言われているのか、最初はピンとこなかった。連絡内容の重大さをようやく理解して、私は気が遠くなりそうだった。これまで選ばれた10%だと思っていたのに。これで10%の可能性はもつとずっと小さくなったということだ。

「今から……そちらへ伺います」

ようやく返事をした。

「人工呼吸器をつけさせていただきますが、よろしいでしょうか？」  
石黒さんの質問に言葉が詰まる。正直言つて、何も心の準備ができていなかった。呼吸状態が悪くなれば人工呼吸器をつけますか、どうしますか、という話を、イヤと言うほど聞いて、そして契約をした。けれど、実際にこういう風に現実になると、本当に慌ててしまう。こういうことは前もって考えるなんて無理なんだ。あれだけ悩んだ契約書だったのに、私の中ではこの時点で石黒さんの口から『人工呼吸器』の話が出るのが余りにも唐突だった。たとえ、延命処置はしないという契約をしていたとしても、実際にその場になれば、簡単に契約を覆しただろう。死んでほしくない。まだ、死んでほしくない。それが追い詰められた身内の心の叫びだ。

私は、延命処置をお願いしたはず。契約書は渡してあるはずだ。何をいまさら……。石黒さんの質問を心でなじりながら私は返答し

た。

「よろしく願います」

私は、とりあえずバッグの中に財布が入っていることを確認して、地中海姫と携帯電話を入れて、家を飛び出した。

地下鉄車両の窓の外を流れるコンクリートの壁を眺めて私は呆然と突っ立っていた。不思議と涙も出てこない。手術が終わった当日の夜、母の胸が大きく動いた映像が繰り返し私の中で流れた。あれは何だったのだろう。母はあの時点で私の声を聞いていたのだろうか。それとも、何かの間違いだったのだろうか。ぼうつとしていて危うく私は地下鉄を乗り過ごすところだった。

ICUに入っただけですぐに聞こえてきた鳥のさえずりは、今の私には耳障りだった。こんな重大な場面で、偽りの鳥の声なんかで和めても言うのか。

母は約束どおり人工呼吸器につながれていた。ベッドに横たわるその姿は昨日と何ら変わらない。人工呼吸器のリズムに合わせて胸が動いているが、傍目からは、あたかも自分で息をしているかのようである。手を握ってみる。暖かいその手は、確かに体温を持っていて、母の皮膚を通して、しっかりと生きていることを私に教えてくれている。

不思議な感覚に襲われる。母が倒れた時、地中海病院でなくて公立病院に搬送してもらっていたら、今頃は……。あの日、斉藤医師は言った。何もしなければ今夜が峠だろうと……。手術をもらったことで、今も母はこうして生きている。昨日と違うのは、人工呼吸器の助けを借りているということだけだ。意識がなくても、体温を持った母が目の前に眠っている、回復の見込みが小さくなったということ以外、昨日と何ら変わらない。本来なら死んでいておかしくないのに、こうして存在してくれている。

私は、この状況をどう捉えたらいいのかわからなくなっていた。死なずに存在してくれていることに感謝したらいいのか、それとも意識が戻らないことを嘆くべきなのか。医療が人の死を先延ばしできることについても、不思議な気がしていた。心臓さえ動いていれば、人は生き続けることができるのだ。それと同時に、医療の限界についても。どんなに力を尽くしても、力を尽くしてもらっても、どこかで悲しい現実を受け入れなければならない。

10%の可能性。まるでギャンブルみたいだ。私は10%に掛けた。熱狂しながら。だけど、残念ながら母は90%の方に入っているみたいだ。母の身に奇跡が起きないことを一度感じてしまうと、今度は助かることを信じる方が難しくなってくる。近い将来母と別なければならぬ現実。私はようやくその現実が目の前にあることを納得し始めていた。そうなんだ、納得なんだ。ここへ来た時にはそれができなかった。

「かあさん、あした、また来るからね」

私は母の頬を撫ぜながら小さく呟いた。

看護師は、石黒さんが別の患者さん家族と話をしている最中だと私に伝えた。「少しお待ち頂ければ……」と言われたが、別に石黒さんから説明を受けなくても、目の前の母の姿が全てだ。私は疲れていた。今日はこれで失礼します、と挨拶をしてICUを後にした。

自宅に着くと、そのまま私はベッドに倒れこむようにして眠りに落ちていった。

次の日、目覚めたときには、すでに朝日が高く上っていた。昨日、病院を出てからの記憶がほとんどない。どうやって帰ってきたのか、どうやってパジャマに着替えたのかもわからない。身体が妙に重かった。母のことを思い出すとため息が出た。目覚まし時計を引き寄

せて時刻を見る。8時20分。部屋全体に灰色のベールが被せられているみたいに、どんよりと空気が沈んでいた。

それでも、やることは沢山ある。私はノロノロと起き上がると、顔を洗って着替えを済ませた。あまりお腹は空いていないが、食べないわけにはいかない。少しでも食べれば元気も出るかもしれない。冷蔵庫を開けると、昨日の食パンの残りがあった。

半ば義務的に朝食を済ますと、私はコンピュータの電源を入れた。メールチェック。翻訳会社から、新しい仕事の依頼が3件来っていた。3件すべて断りの返事を書く。目の前の仕事のことだけで精一杯だった。それだけじゃない。今は仕事をしたくない、それが私の正直な気持ちだった。

## 第12話 人工呼吸器（後書き）

次話は、5月23日（金）に更新予定です。

### 第13話 お会計

今日は、仕事をするよりも病院を優先した。こんなに気分が乗らないことは、翻訳の仕事をやるようになってから初めてのことである。母の顔を見たら、少しはやる気が出るかもしれない。そんな期待もわずかに抱いて、私は電車に乗った。

シートに腰掛けて、”姫”を取り出した。今日のスタッフを見ながら、昨日、9月分の支払額を確認する途中で、そのままになっていることを思い出した。

『お会計』のページを開ける。

9月分会計をタッチ。

5,964,351円

59万円？

いち、じゅう、ひゃく……

思わず、「ええっ！！」と大きな声を出してしまう。周囲の人が迷惑そうに目だけをこちらに向ける。

一瞬、周りが真っ白になった。

心臓は張り裂けそうに鼓動を打つ。

何度も確認する。

596万円！

何かの間違いではないか……

震える手で明細の欄を確認すると、ずらつと項目が出た。

入院手続き費用から始まって、検査代、薬剤代、そして手術の費用がずらり。明細は何ページにも渡っていた。

いや、高いだろうとは思っていた。もしかしたら100万円を超えるかもしれないと、密かに心配していた。けれど、596万円は



はるかに私の予想を超えた金額だった。

心臓がバクバク音を立てている。  
どうしよう……

気分が悪くなりながらも何とか病院のICUまでたどり着く。

母は半座位の状態でベッドの上に休んでおり、その口には管が入っている。無表情のその顔を見ると、これまでになかった感情が湧いてくる。

「かあさん……。かあさん……わたし……」

かあさん、わたし、一体、どうしたらいいの！

体温を持ったままそこに存在している母が私の問いに答えるはずもなく、規則正しい人工呼吸器の音だけが私の心に響く。

しばらく、ベッドの横から母の腕に顔をつけて、私は流れ落ちる涙を隠した。病衣の袖が涙に濡れた。一番の相談相手だった母。今は何も答えてくれない。

やがて、水色のユニフォームを着た理学療法士がやってきた。この前とは違う人だ。

涙を拭いて、お願いしますと挨拶をして、私は一旦ICUの外に出た。

回復の見込みのない患者に施すりハビリテーション……。何の意味があるのだろうか。私はディスプレイのウェアを外しながら、よく働かない頭で考えた。

ICUの外にある会議室横の自動販売機で私はコーヒー牛乳を買った。

長いすに座って喉を潤しながら、これから色々対策を練る必要があると思った。悲しみに暮れている場合ではない。お金のことをどうするか、真剣に考える必要があるのだ。

母の入院がこれからどこまで続くかわからないが、やれることはやってみようと思ったのだ。後悔しないためにここへ搬送してもらった。請求額は私の予想を超えた金額だったが今さら文句を言っても始まらない。手術が一番お金がかかるはずだから、最初の請求が一番高いはず。何とかなるさ。

『死までの時間稼ぎ』、石黒さんは、かつてそう言った。だったら、残されたわずかな期間を悔いのないように過ごさなくては。

9月分の596万円を2カ月後までに準備することが先決だ。具体的に考えながら、少しずつ私は理性を取り戻していった。

結局、私はICUへは戻らず、自宅に帰って母の通帳を確認した。今月分の支払い額約600万円を捻出しなければならない。

何度見ても同じ。普通預金が240万円と定期預金が650万円。私の貯金が75万円あるが、母の普通預金と足しても足りない。最初から定期預金に手をつけなければならないのだ。

時計を見る。12時40分。とにかく銀行に行こう。

支払いまでに2ヶ月あると言っても、私は落ち着かなかった。自分の通帳ならともかく、母の通帳のお金だ。KPカードは私名義で作ってある。母の定期預金を解約して引き出し、私の口座に移し替える必要がある。

銀行は混んでいた。

私は順番待ちの紙を取り、記入用デスクの上の用紙を探した。定期預金を解約するための紙を取り出し母の名前を書き印鑑を押す。

そうして私は定期預金用紙と番号用紙を手を持ったままソファの端に腰かけた。

手持ち無沙汰で、落ち着かない。ソファ横にあるマガジンラックから雑誌を適当に取ると、膝の上に広げた。別に読むのが目的ではなく、何かしていないと落ち着かない、それだけの理由だった。

何も考えずに一番手元にあるのを取ったので、おじさんが読むような雑誌だった。すぐに女性用雑誌に変えるつもりでぺらぺらとページをめくってみた。そして……

私は、めくっている途中、ある文字を捉えた。その文字を追いかけて、急いでページを数枚元に戻す。そこにあったのは、「地中海病院」の文字。面白いものだ。自分が関係すると、コンマ何秒で流れていく些細な文字でも目に留まったりするのだから。

『今、地中海病院が熱い』

雑誌記者と地中海病院理事長との対談が載っていた。

『最高の医療、最高のサービスを患者様とご家族の皆様へ提供するために』という副題が踊っている。モスグリーンの背広の下には同系色のネクタイをしたおじさんの写真。前頭部が少し薄くなっているが、にこやかなスマイルは営業用か。

ホテルのようなコンシェルジュ、最新式の医療機器を揃えた衛生的な手術室、そしてスタッフ会議の様子を写した写真がページの下の方に並んでいる。

記者 『医療の分野に進出されたのはどうしてですか？』

理事長 『以前から日本の医療のあり方に疑問を持っていたからです。病気でつらい時に、患者は、文字通り、ペイシエント、つまり我慢を強いられる。一刻も早く診てもらいたい時に、ひたすら待合室で待ち、挙句の果て、ろくろく診察もされないまま検査、そして薬をもらうにも、また、待たなければなりませんでした。あれを何とかしたいと思っていましたね。医療はサービスである、それを形にしたかった。そのためには閉ざされた世界に私のような外部の者が乗り込んで医療界を改革する必要があると思いました』

私は、雑誌に夢中になっていた。自分の番号が繰り返し呼ばれてはつとした。雑誌の表紙を確認する。『経営のプロ 10月号』。

マガジンラックに投げ入れて、急いで受付に走った。

「お願いします」

母の通帳と印鑑と用紙を差し出した。銀行員は、それらを確認して、

「免許証か保険証はお持ちでしょうか？」と聞いてきた。

「あ、私、娘ですが」

そう言つて、自分の免許証を探していると、

「ご本人がご来店になるか、それが無理である場合には、委任状が必要になります」

にべもない。

その日、私はお金を下ろすことができなかった。事情を説明すると、病院から入院証明書一通と委任状が書けない理由となる証明書一通、そして住民票か戸籍抄本を一通持つてきてくれと言われて、私はすぐごと引き下がった。母のために母の預金を引き出すだけなのに。でも、仕方がない。このご時世、いろんな人がいるから。書類をそろえれば済むことだ。帰り際、私は、私が投げ入れた雑誌を横目で再確認しながら、銀行を後にした。

### 第13話 お会計（後書き）

次話は、5月21日（水）に更新予定です。

## 第14話 分割払い

私は病院へ引き返すことにした。お金の目処が立たなければ、何も手につかない。

途中、コーヒーショップのチーン店『ベックスター』に寄った。カフェラテと焼きサンドを片手に窓際のバーを陣取る。遅い昼食を取りながら地中海姫を取り出してもう一度確認。2日目の金額を見ておきたかった。

9月11日のお会計…… 320,576円

32万円か。今度は昨日ほどのショックはなかった。それでも、やつぱりため息が出た。

一気に焼きサンドを食べて、私はベックスターを後にした。お金のことばかりを考えながら病院へ向かう。

地中海病院の中央玄関からまっすぐコンシェルジュを目指した。

高尾さんと呼び出してもらった。5分ほど待って、彼女は笑顔で姿を現した。

「相談があつて来ました」

私が告げると、高尾さんは軽く頭を下げて、私を12番ブースへ促した。

ここへ来たのがずっと昔のような気がする。あれから、短期間のうちに状況が大きく変わった。

「どう、なさいましたか？」

高尾さんは、両眉を上げて、心配そうに私を見る。

「母の定期預金をひき下ろすのに、入院証明書と意識がないことを証明する書類が必要です。それから、次回の支払い、分割でお願いしたいんですけど」

高尾さんは、ニコニコしている。

「わかりました。診断書があればいいと思いますよ。コーデイナーに連絡しておきます。担当は石黒でしたね？ 一通5000円になります」

高尾さんは、テーブルの上にあるコンピュータのキーボードを素早く打つ。石黒さんに連絡を入れているみたいだった。

（また、お金が要るのか……）心の中で思ったが、なるべく顔に出さないように気をつけた。

「それでは、分割払いについて説明させていただきますね」

高尾さんは、母が入院したあの日と何一つ変わらず、澁みなく説明を続ける。私が動揺してしようと、全く関係なく冷静な対応だ。所詮、他人なんだな、と冷めた感覚で彼女の話を聞く。

分割払いというのは、早い話がローン、借金である。あまり気は進まなかったが、仕方がない。これから最終的に入院費用がどうなるのかわからない。色んな手立てを立てておきたかった。話を聞いているとローンは上手い仕組みになっていた。最初に何回払いかを決め、さらに毎月に支払える限度額を申告しておく。万一、入院が予想以上に長くなって申告限度額を超えた場合には、支払い回数が自動的に増えていくというタイプのローンを勧められた。

予想以上に長くなった場合……という説明を聞いた時、何とも言えない複雑な思いが駆け抜けた。高尾さんの表情はまるで変わらない。淡々と流暢に言葉が流れていく。

母の入院がどこまで続くのか、そのことを考える度に、私は苦しい思いに苛まれる。一日でも長く生きていてほしいと願う気持ちとは別に、私のどこかに、あまりそれが長くなると、支払額がどんどん大きくなってしまふことを心配している自分がいる。

お金のことが心配になればなるほど、二つの気持ちの対立がより鮮明になって、私は酸素不足に陥る。お金と自分の親の命、二つの事象に挟まれもがき苦しんでいる私の姿を見て、真つ黒な悪魔がニタニタ笑っている。意地悪な眼差しでじっと私を見ている。両手を

振って悪魔を追い払う。

ローンを組んだことで、私は何となくほっとしていた。とりあえず当面は悩まなくて済む。逃げでしかないかもしれないが、それしか方法がなかった。

ICUにちよつとだけ寄って母の姿を確認して、私は帰宅した。正直言って、母の顔をまともに見るのがつらかった。何だか後ろめたい気がしていた。話しかける言葉も見つからず、黙ったまま背を向けた。

自宅に戻って、私はコンピュータの電源を入れた。今日初めて仕事に取り掛かるのだが、すでに、夕方4時。あつという間に一日が過ぎていく。やりかけの翻訳ページを開いたが、それを見ながら翻訳という仕事は何だか馬鹿馬鹿しく思えてくる。入院初日は横に置いておくにしても、一ヶ月必死になって稼ぐ給料が一日分の入院費用にも満たないのだ。母の入院が一日伸びる毎に、一ヶ月以上タダで働く計算になる。ローンだから利子を考えたとそれ以上か。私はイライラしていた。何に對してだろうか。時間がないこと？ 仕事が進まないこと？ 母の意識が戻らないこと？ それとも、お金のこと？ たぶん、全部ひっくるめて。どうして、あんな金額になるのか？ おかしくて思わず笑いが出る。”姫”を見れば、答えが書いてある。何ページにも渡って記されている明細書が答えだ。

気分が乗らず、私はサンダルを履いて外に出た。向かう先は近所の本屋。結構大きな本屋さんで重宝している。仕事の資料を探すこともあるし、疲れた時の気分転換にもなる。

普段は通り過ぎるだけのコーナーで『経営のプロ 10月号』を探す。あつた。それは、ジャージ姿の中年男性の目の前にあつた。草履履きのそのおじさんに怪訝な顔をされたが、「すみません」と断ってから構わずに横から手を伸ばす。最後の一冊だった。私は男



性用雑誌とビジネス雑誌がごちゃごちゃに並ぶこのコーナーから早く立ち去りたかった。大急ぎで支払いを済ませて自宅に向かう。

経営者向けの雑誌。患者を読者対象にした物とは切り口が違う。私が地中海病院で感じた違和感を説明してくれる内容がそこにはあった。

『継続的に質の高い医療サービスを提供しようと思って、経済的基盤がしっかりしていないと無理なんです。医療従事者には残念ながらそこを理解していない者が多い。これはね、理解させようと努力するよりも、完全に切り離れた方がいい。お客様の経済状況によってどこまでならサービスが可能なのを見極めることが大切で、事務職員に、厳しく教育・訓練します。そして、医療スタッフには、許される範囲内、つまりベテランの事務が判断した範囲内で最大限の努力をしてもらうわけです。それを徹底することが大切だと思います』

これだ。高尾さんと石黒さんの間にある溝のようなもの。事務と医療従事者が切り離されているのは、経営方針がそのまま反映されたものだっただ。

## 第14話 分割払い（後書き）

次話は、6月2日（月）に更新予定です。

## 第15話 経営のプロ

地中海病院の医療費がずば抜けて高いことについて、意外な理由が書かれていた。それは訴訟対策。病院2系統性法案が採用されてから、医療訴訟は圧倒的に民間病院相手のものが増えたのだそう。弁護士が公立病院相手の医療訴訟を敬遠しているという。

医療訴訟は専門の知識が要求される。手間がかかる上に公立病院に向かつていっても勝訴率が低い。それは、裁判では公立病院の多忙さがかなり考慮されること、やれる医療内容に極端な制限があることが原因だそう。そして、何と言っても、原告側の支払能力が低いことが弁護士が訴訟を引き受けたがらない大きな理由になっていた。

一方、民間病院相手の訴訟だと、多額の損害賠償額を請求することができ、その分、弁護士への報酬額も大きくなる。また、医療内容も高度な内容が多いため、思わぬ事故や合併症の発生も多くなる。患者側の期待も大きいため、一旦こじれると難しくなるケースが多いと言った。

訴訟対策は、予防策が大事と理事長は力説している。見舞いに来ない家族ほど訴訟を起こす傾向が強いため、すべてを記録として残すのが有効なのだそう。

「見舞いに来たこと」を証明するのは簡単だが、「来なかったこと」を証明するのは難しい。すべてを記録することで初めて可能になるのだ。家族が「見舞いに来たかどうか」は本来、判決とは関係ないと思うのだが、微妙な所で裁判官、裁判員の心象に影響を与えるのと患者からの提訴そのものを諦めさせる手段にもなると言う。病院側に有利な形で和解に持ち込む。

『本来は、患者様やご家族の方の安全をお守りするために取った万全のセキュリティ対策でしたが、副次的に訴訟対策になるというメ

リットもありました』と述べているが、どちらが主目的か、この理事長の言葉をそのまま信じる気にはなれない。

さらに、経営状況に言及していた。

『この数年で非常に高い利益率を上げられるようになりました。株主の皆様にも安心していただけたと思います』

そのページには、地中海病院とK P保険会社の経済状態を示すグラフやら表やらがたくさん載っていた。

私は理事長の経歴が気になった。ページをめくって左上の青い枠内の紹介を見ると、K P保険会社で長年営業部長を務め、地中海病院理事長に就任する前は、半年ほどK P保険会社の代表取締役社長補佐だったことがわかる。

『最高の医療、最高のサービスを患者様とご家族の皆様へ提供するために』という副題からイメージしていた内容とはかけ離れたことばかりが書かれていた。全てお金の話ではないか。経営の本だから当たり前なのかもしれない。だけど、私としては、もう少し患者や患者家族のことを述べてほしかった。

こんな雑誌、読まなければよかった。

私が病院に支払うお金のうち、純粋に医療に使われるのはどれだけなのだろう。訴訟対策に莫大な費用がかかるという話と株主への配当金の話を読んで、私は気分が悪くなった。それは私の中に病院に『搾取されている』という気持ちが発生したからに他ならなかった。一体、この病院は誰の方を向いているのだろうか。

そして、私の気持ちを理解してくれていると思っていた高尾さんに対しても、何とも言えないイヤな感情が沸き起こってきた。

彼女は、徹底した教育を受けている。どこまでなら私からお金が取れるかを値踏みしていたのだろうか。

人工呼吸器をつけるかどうかの選択を迫られ、私が悩んでいた時、石黒さんが、直接高尾さんに相談するようにではなく、わざわざ力ウンセリングを勧めた本当の理由は何だったのだろう。私は、自分の洞察力が足りなかったのではないかと思い始めていた。あの時私は一体、誰のアドバイスを聞くべきだったのか……。

契約書を提出した時の石黒さんの困惑した表情、それを提出しているにも関わらず、実際に装着が必要になった時に、わざわざ”姫”と電話の両方で再確認の連絡を入れてくれたこと、そういう場面が次々に私の中に蘇ってきた。石黒さんは最後の最後まで私に何らかのメッセージを送っていた……。

言葉は悪いが、私は高尾さんに「はめられた」のだろうか。彼女に対して不信任感が募ってきたが、しかし、どの場面を取っても、何一つ反論することができないことを思い知る。

例えば、高尾さんならどうするかという私の質問に対する答えも、曖昧なものだった。それは、決して誠実な答えなんかじゃなく、「私ならつけてもらう」と断定しないことが彼女の逃げ道を確保していたのだ。

これまでの高尾さんとのやり取りを色々思い出してみたが、文句の言い様がない。私は愕然とした。

私がもしも地中海病院の経営方針を前もって知っていたとしたら、果たして母の延命処置を拒否しただろうか。

しばらく考えてみたが、答えが出てこない。

公立病院の酷い噂はよく耳にする。あんなの医療ではない、という声も聞く。極端な医療制限が医療の幅を狭くしている上、診察まで延々と待たされるのでその間に結論が出てしまう。つまり、公立病院は、病院側が患者の命の系にハサミを入れる。しかし、民間病院の場合、患者家族にハサミが渡される。ハサミを使うかどうかは、

家族の懐次第というわけだ。

私はインターネットで検索をかけてみた。地中海病院と経営を掛け合わせてみると……

沢山の検索結果がひっかかってきた。私は、それらの内容を一つずつ開けてみて、私の知らない情報がないかを探した。”経営のプロ 10月号”に関するものも複数個混じっていた。

日本国内だけでなく、海外も含めて探してみた。

”The Mediterranean Hospital”  
”Japan” ”Finance” ”Business” ”Management”  
思いつく単語を掛け合わせて片っ端から検索をかける。

私は気になるサイトを広げては夢中になって読みまくった。

沢山の情報があつた。ネットの中の情報であるからウソとマコトが入り乱れているに違いなかったが、それでも有用な物が沢山あつた。

そうして得られた結論はこうだ。地中海病院は私や母には身分不相応だったということ。実に簡単な結論だ。

最低限の医療は公立病院が保障しているのだから（ホントか？）、国は責任を果たしている。地中海病院は、より充実したサービスを望んでいる人向けの医療であつて、金のない者が来る所ではない。治療費が高いというハードルがあるからこそ、限られた人たちへ満足いくサービスを提供することが可能である。

時々、KP保険に加入していない人間が間違つて受診することがあるが、何を考えているのか理解に苦しむ、という主旨の書き込みがあつて、その言葉はひどく私を傷つけた。自己責任、という言葉も多く見られた。

地中海病院の報酬制度には成果主義が導入されている、ということも新たな情報だった。特に事務職には細かい規定が設けてあるという。事務職の成果主義？　どういうことだ？　たくさんのサービスを押し付けるほど給料が上る、というわけか？　冗談にもほどがある。

英語で検索した物の中に、保険会社が病院を経営する上で、地中海病院を参考にするといい、という主旨の物があつた。日本の医療界はまだまだ魅力的なマーケットである。海外と比べて専門職の労働賃金が低いので、病院としては、より高い収益を上げることができる。また、医師や看護師は、労働力であると同時に、医療事故の損害賠償保険に加入してもらつた大切な顧客でもある。仕事ぶりや評判を全て把握できるので、保険会社としては安心でもある。

二つの病院の収益率を比較するグラフがあつた。同じ規模の病院で、地中海病院と海外の病院の比較だった。

もついい。充分だ。

医療を仁術だなどと考えていた私がバカだった。医療は契約であり、商品である。地中海病院の理事長は、平然とそう語っていた。私の認識が甘かった。雑誌から得られた情報も、インターネットで探した情報も、ことごとく私の甘さを知らしめる内容ばかりだった。

## 第15話 経営のプロ（後書き）

次話は、6月6日（金）に更新予定です。



## 第16話 悪魔のささやき

5日目。

私は、今朝一番に高尾さんから診断書を受け取った。それはきちんと病院の封筒に入れられ封印が押されていた。その足で、市役所へ行き住民票を出してもらい、そして銀行へ行った。銀行で無事母の定期預金を解約することができ、私はほっとした。私の通帳には650万円が入った。実際に自分の通帳の金額を見ると、今まで私の通帳にはない桁の数字が打ち込まれている。大きなお金を自分が管理していることを実感した。母が、20歳過ぎからコツコツと貯めてきた貯金。そのお金が短期間のうちに無くなるのだ。母の治療のためとは言え、とても虚しい気がした。あんな雑誌を読んだ後だけに、その思いは余計に増幅されている。

何にせよ、当面の心配事からは遠のいた。それが決して解決策にはならないのだが。銀行を出た時には、ほとんどお昼になっていた。このところ毎日、私はウロウロするだけで時間を使っている。

昨日私がICUで過ごしたのは、ごく短時間だった。その反省もあって、私は、銀行帰りに、再び病院を訪れた。母に会いたくて……というのとは少し違う。自分でそう仕向けなければ、病院から足が遠のいてしまいそうな自分が怖かった。

半座位の姿勢で眠っている母の口に入っている管は、途中で連結されてそのまま人工呼吸器につながっていた。看護師が連結を外して細いチューブをそこから入れて母の気管に溜まった痰を吸引している。ズーツーツと音がして、痰が取れていることがわかる。短時間のうちに上手にお掃除をするものだ。

吸痰を終えて彼女は呼吸器の管を元通りにはめ、聴診器で胸の音を聞き小さくうなずいた。それから母の身体の向きを少し変え、病衣を整えてから微笑みながら私に小さく頭を下げた。「終わりまし

たよ」という合図。

母が倒れてから、すでに5日目。最初の頃は、いつ意識が戻るだろうかと期待していたが、少しずつ母の顔は母の顔でなくなってきた。今では、どこからどう見ても、死を待っただけの意識のない病人管の入った口は少し歪んだままだらしい格好になっている。こんな管を突っ込まれて払いのけるでもない、されるがままの母。「表情がない」ということが、これほどまでに外観を変えてしまうのかと思う。でもそれは、母が変わったのではなく私の受け止め方が変わっただけなのかもしれない。

母は、これで幸せなんだろうか。母が生きている理由は何だろう。私の自己満足のため？ そのためだけに生きているのだろうか。母自身にその意味が果たしてあるのだろうか？

別れの瞬間を先延ばしするために母は延命処置を施された。現実を直視できずに延命処置をお願いしたことは私のエゴではなかったか。母の回復がもはやありえないのだと感じるようになってから、私は、そういう思いを強く抱くようになった。心臓が止まるまで、延々と続くのだ。お金のこともあるけれど、それを抜きにしても、人工呼吸器で意味のない時間を過ごしていくことに疑問を感じ始めていた。

私はハサミを手渡されて、そこから逃げた。母の命の糸を切ることでできなくて、結果、母は、こんな姿で生きている。あの時にやれなかったことを今やればいいのではないか？ 看護師がさきほど外したばかりの連結部分に視線が向く。あそこをはずせば、人工呼吸器から送られる空気は母の胸に到達しない。

大きいため息をつく。私は疲れているのだろうか。頭を振って自分の考えをすぐに否定した。ベッドのへりに悪魔が座って二タ二タ笑っている。邪魔な奴。あっちへ行つて。

私は母の腕をさすった。手を握り締めても腕をさすっても、母は何一つ反応しない。こんな状態がどこまで続くのだろう。

突然、石黒さんのセリフが聞こえてきた。

「人によりますので何とも言えません。数時間のこともありますし、数ヶ月に及ぶこともあります」

最初に延命処置について説明を受けた時に私が問いかけた質問に対する回答である。あの時の彼のセリフがよりによってこんな場面で蘇ってくるなんて。私は下を向いて耳をふさぐ。

どこまで続くかわからない。延々とこの状態が続く可能性がある……。生きているのか死んでいるのかわからない状態で、母はこのベッド上でひたすら呼吸を続けていく可能性がある……。規則正しく、機械の命じるままに。

結果としては同じことではないのか？　だって、あの時切っていたら、とつくに母の命は終わったのだ。終わる時間が少し延びるというだけではないのか？　私には覚悟する時間が必要だった。ハサミを入れる覚悟。あの時点で、私にはどうしても使えなかった。だって、そうでしょう！　誰だって、いきなりハサミを手渡されて、そのまますぐに使えないでしょう？　それとも、そんなことを平気でできる人がいるんだろうか？　いきなりハサミを渡されて、すぐに糸を切れるんだろうか？　ハサミを使うことで肉親が息絶えた時、誰がその事実をまっすぐに受け止める自信があると言っただろう？　どうしてこんな残酷なことを私に要求してくるんだろう！　そして、今度は少しずつ弱っていく母を見続けなければならないのだ。どこまで続くかわからない苦しみを私は無条件で受け入れなければならない。どんなに母が可哀想でも、黙って耐えなければならないのだ！

もう、いやだ。こんな毎日、耐えられない。もうたくさん……！  
！

ああああああああ……！！

## 第16話 悪魔のささやき（後書き）

次話は、6月9日（月）に更新予定です。

## 第17話 罪

ビビーーーーーッ

耳をつんざく警報音が私の心臓を射抜く。

反射的に私は両手を引っ込め、そのまま凍りついた。

看護師が飛んできた。遠くにいる別の看護師からの視線を肌が感じている。

私は息もできずにその場に立ち尽くす。顔を上げることすらできない。

私の両腕は母の顔近くの空中で停止していて、その中途半端な姿勢は「私がやりました」と周囲に告げている。そしてその先には、外れた管の端がそれを支えるアーム部分からだりりと下に垂れてゆらゆら小さく動いていた。

看護師の動きは素早かった。

連結部分を元のようにつなぐと、その姿勢のまま上目遣いに視線だけを私に2秒間注いだ。永遠とも思える2秒間。そして、何も言わずに警報音を解除した。ICUには、異様とも思える静けさが訪れ、再び鳥のさえずりが降り注ぎ始めた。

私の視界の端の方で看護師が淡々とそして迅速にやるべきことをやっているのがわかった。聴診器を母の右胸にあてたかと思うとそのまま左へ移動させる。そして母の人差し指につけられた機械の数字を確認し、やがて、彼女は私の視界から姿を消した。その間、私は微動だにできずに放心していた。母の胸は、まるで何事もなかったかのように、規則正しく動いている。

やってしまった、とうとう。いつかは実行するだろうと密かに思っていたことだった。こんな他人事のような言い草が通用しないことは自分でも知っている。だけど、これまでに私の頭の中で何度も

流れた映像だった。あんなに大きな警報音が鳴ることまでは想像できていなかったが。ふと見ると、あの意地悪な目をした悪魔が高笑いをしている。

私は母の命の糸を切り損ねた。母を助けるができなかった。しかし、一方で、ほっとしている自分もいた。それは、母の死を再び先延ばしした、という安堵感でしかないのだが。どの段階であろうと、直接ハサミを使うのは難しい。どんなに母が哀れに見えようと自分の親にハサミを使うことが平気であるはずがない。看護師が飛んできてくれたことに感謝している私がいる。

しばらくすれば、警察官がここへ来るだろう。殺人未遂犯を逮捕するために。

ぼうつとそんなことを考えていると、さきほどの看護師が再びやってきた。彼女は、黙ったまま、手に持った黄色いビニールテープを連結部分に巻いた。ハサミでテープを切り取り、丁寧に貼り付けて、彼女は再び私の元を去った。

じっと立ったまま、私は警察官の到着を待った。

母の手を静かに握り締め、このまま死に目に会えないのだろうか、あ、とそんな事を考えた。今が別れの時。私が刑務所に入っている間に、多分、母は絶命するだろう。暖かい母の手。少し力を入れて握り締める。

- - - かあさん、ごめんね。

何がごめんなのか自分でもわからなかったが、自然に私の口をついて出た。

どれだけ待っただろう。警察官は来ない。それどころか、いつの間にかICUにはまるで何事もなかったかのような穏やかな時間だけが流れている。看護師はそれぞれ迅速に動き回って日常業務を遂行している。

私の緊張感は別の色合いを濃くしていった。

これは一体、どういうことなのだろう？

患者家族が人工呼吸器の連結部分を外したのだ。契約違反、そして、殺人未遂。なぜ、誰も一言もそのことに触れないのだろう。なぜ警察官が来ないのだろう。どう考えても不自然である。

私はどうしたらいいのかわからずにいた。30分もじっと立っただけである。腕はベッド横についているが、動くことで逃げると思われてはいけないうとしてしているのだ。かと言って、まさか私から看護師にどうなっているのかを尋ねる勇氣はなかった。

ICUに姿を現したのは、警察官ではなく石黒さんだった。

彼は、まっすぐ私に近づいてきた。

「こんにち、わ……」

彼の挨拶は、尻切れトンボだった。目が呼吸器の管に吸い付けられている。視線の先には黄色いビニールテープが巻かれた連結部分がある。

「あの……、実は私……」

激しい鼓動を感じながら、石黒さんに自分の罪を告げようとしたのだが、石黒さんが私の言葉を遮った。

「あ、ああ、はずれちゃったんですね。よくあることです。テープを巻いてるから、もう大丈夫……」

明らかに石黒さんの方が動揺している。彼は私が呼吸器を外したことを知っている。いや、連結部分がテープで巻かれているのを見て知った様子である。

「ちがうんです！ 私、わたしがやったんです！」

私は泣き崩れた。もう限界だった。

「顔を上げてください。あなたは悪くない。監視カメラには何も映っていません。証拠は何もない。あなたは何もしなかった。そして……、黄色いテープは、監視カメラを通るとただの白色にしか見えません。誰もあなたを責めたりしません。お願いですから、自分を責めるのはやめてください」

私は静かに顔を上げた。石黒さんが、今までに見たこともないよ



うな優しい顔で目の前に立っていた。

「監視カメラ……、黄色いテープ……」

何の話かわからなかった。

「とにかく、何も心配はいらないから。いいですね」

有無を言わさない強い意志を持った石黒さんの眼差しがそこにはあった。

「カウンセリングを受けましょう。あそこには監視カメラもない。プライバシーが完全に守られています。何も心配せずに相談されるといい。予約を入れますから」

私には今、何かを決定する、という意志が完全に消失していた。今後のことを冷静に考える余裕があるはずもなく、今、私が置かれている状況すら認識できずにいた。もう、何もかもどうでもいい。カウンセリングを受けることで何かが好転するはずもないと頭の片隅で思っていたながら、わざわざ石黒さんの提案を否定する余力も私にはなかった。

石黒さんは直接カウンセリングルームに電話をかけ、1時間後に新島心理士に会うことになった。私は、だまって母の横に座って時間が経過するのを待った。静かに上下する母の胸。看護師が体温とモニターのチェックに来た。ぼんやり放心している私に声をかけるでもなく、いつもと変わらず、看護師としてやるべきことを淡々とこなす。そっとしておいてほしかったから、有難かった。座った姿勢の母のお尻が少し下にずり落ちているのに気づいた看護師は、別の看護師を呼んで、二人がかりで母を引き上げてくれた。私は邪魔になるので、その時だけ立ち上がってスペースを作った。

予約時間10分前に、石黒さんが再びやってきた。私が本当にカウンセリングに行くか心配だったのだろうか。私には喋る元気もなくて、黙って頷いた。

## 第17話 罪（後書き）

次話は、6月13日（金）に更新予定です。

## 第18話 叔父

カウンセリングルームは6階にあった。

ドアはカードを差し込む前に内側から開いた。新島心理士が小さく「どうぞ」と頭を下げる。

壁には、お花の絵が数枚飾ってある。柔らかな色の花の絵は、病んだ心を癒すのに効果的なアイテムなんだろうか。

ゆったりしたテーブルに向かい合って座る。

「日野さん。苦しいですね。ここでは何でも話していただいていいですよ。話したくなければ、無理に話す必要ありませんけど」  
新島心理士は優しくかった。私はどうすればいいのかわからなかった。話したいことがあるような気がするが、果たしてここがその適切な場所なのか、この人を信用していいのかさえ、私には判断ができなかった。

ふつと部屋の天井の隅にある監視カメラに目が行った。監視カメラがないなんて、石黒さん、ウソついて……。

新島心理士は、私の視線を追いかけて後ろを振り返った。そして、笑いながら言った。

「ああ、あれは、ダミーです。ここだけダミーのカメラが設置してあります。もともとは本物の監視カメラを設置する予定になっていたのですが、私たちが猛反対したので、取りやめになりました。妥協案としてダミーを置くことになったんです。ダミーだと言っちゃったら、その役割も果たさないですけどね」

新島心理士が笑うと口元に小さな笑窪ができた。

監視カメラがダミーかどうかは、今の私にはそれほど重要な問題ではなかった。私の犯した罪についても私は隠すつもりはなかったし。ただ、石黒さんが私にウソをついたのかどうか、それはとても重要な問題だった。

「私は、母の呼吸器の管をはずしました」

この人になら話をしてもいいような気がしてきて、私はポツリと言った。新島心理士は驚いた風もなく、黙って聞いている。

「大きな警報音が鳴って、看護師さんが飛んできました」

彼女は、少し右に傾けていた首を、今度は左に傾けなおして私の話に耳を済ませている。

「びっくりなさったでしょう？」

私は彼女の目を見て喋った。

「心臓が止まるかと思いました。あんまり大きな音だったから」

そこで会話は途切れてしまった。会話は途切れたが、決して不快な時間ではなかった。一時の静寂の間を破ったのは、新島心理士の方だった。

「実は、半年前にも同じようなことがあって……」

私は、驚いて顔を上げた。今度は、新島さんが喋る番で、私が聞き役だった。

半年前に患者家族が人工呼吸器を外して逮捕された。黄色いテープはその事件後に石黒さんが提案したICU内だけで通じる暗号なのだそうだ。監視カメラはカラーであるが、カメラの性質でモニターには黄色の色調が鮮明に反映されない。石黒さんはそれを利用して黄色いテープを使うことを提案した。新島さんにも、カウンセリングの予約時に「黄色いテープ」という短い言葉で私の状況が伝えられた。

「私が逮捕されたら、私からお金が取れなくなる……、皆さん、そう思っておられるのでしょうか？」

私は、失礼な質問をしていることを百も承知だった。私はすっかり病院不信に陥っていた。新島心理士は不躰な質問にも全く動じなかった。

「日野さんが病院を疑うのは仕方ないことだと思っていますが、逮捕されてもローンが無くなるわけではありません。石黒は、前回

の事件の後、ひどく落ち込んでいました。これは私の個人的な見解なんですけど、彼はあなたを犯罪者にしたくなかったんです。ただでさえ肉親が植物状態になって苦しんでいるのに、その上、犯罪者になんかなったら、その後の人生はめちゃくちゃになります。今回のことでは、ICUの看護師が、日野さんの不審な動きに気づいて監視カメラの電源を一時的にオフにしたみたいですね。4分後に電気系統の不良として事故報告がなされています」

そういうことだったのか。私はICUの看護師さんたちに助けられたのか。感謝しなければならぬと思うと同時に、病院内の対立が私の想像以上に大きいことを感じていた。

一息入れて、新島さんが質問した。

「お母様のこと、お一人で問題を抱えておられるみたいですけど、どなたか他にいらっしゃいませんか？ ご家族がご親族と一緒に考えてもらえる方がおられれば、それだけでも随分と楽になると思うんですけどね。これまで、いろんな事をお一人で決めてこられて大変だったでしょう？」

はっとした。何という的確なアドバイス。叔父がいた。叔父の存在を私はすっかり忘れていたのだ。

私はぎりぎり30分で退室した。それ以上になれば、10,000円が15,000円になるからだ。ところが、ずいぶん後になってから知った。私がその日カウンセリングを受けた記録はどこにも残っていなかった。石黒さんが、コンピュータを使わずに直接電話で彼女に予約を取りつけたのは、カウンセリングの受診記録を残さないためだったのだ。彼が徹底的に私の罪を隠し通すつもりでいることを知って、改めて申し訳ない気がした。

彼女が私に叔父の存在を思い出させてくれたことは本当に有難かった。叔父に相談したところで支払額が減るわけではないが、一人

で悩まなくて済む、という安心感は私には大きかった。

その日の夜、私は叔父が帰宅する時刻を見計らって、電話をかけた。母が倒れた知らせに叔父はショックを受けていた。無理も無いしばらく間があつて、最初に彼の口から出たのは「沙希ちゃん、大丈夫かい？」という言葉だった。これまでの悲しみや苦しみが、一気に出口を見つけたように押し寄せてきて、私は電話口でワンワン泣いた。

次の日、叔父は仕事の都合をつけて病院に駆けつけてくれた。人工呼吸器につながれた母の姿を見て、彼は黙ったままハンカチで目を押さえた。言いたいことが出てこない様子で、しきりため息をついている。

「叔父さん、ごめんなさい。もっと早く連絡するべきだったのに……」

「いいや。沙希ちゃん……、ホンマ、……ホンマ一人で辛かったなあ。はああ。悪かったなあ。おっちゃん、氣いつかんくて……」

私のことを氣遣ってくれる人が傍らにいる、それだけで、どれだけ救われることだろう。

私たちは病院内の喫茶店に場所を変えて、色々話をした。叔父は、母のことよりもむしろ私のことを心配してくれた。明日から3日間、私は母のことを叔父に任せることにした。仕事を優先しろ、との叔父の計らいだった。

「地中海病院って、テレビでは見たことあったけど、いやあ、すごい所だね。姉さん、こんな所にいるんだからのんびり寝てる場合じゃないんだけどなあ。意識がないのが勿体ないなあ」

叔父が無理をして冗談を言っているのが分かったが、私は、何だか嬉しくてくすつと笑った。

「やっと、沙希ちゃんらしくなった」

顔をしわくちやにして叔父は笑った。目尻に涙が溜まっている。

イングリッシュティーを口に含むブーツという音を聞きながら、母が倒れてから、初めて気持ちが軽くなったことをしみじみと感じていた。

## 第18話 叔父（後書き）

次話は、6月18日（水）に更新予定です。



## 第19話 疲労

私は今までの遅れを取り戻すように、必死になって仕事に打ち込んだ。地中海姫と入室カードは叔父に渡してある。それだけでも随分と気が楽だった。オレンジ色の点滅がないか、いちいち気にする必要がないのだ。万が一、母の容態に変化があれば電話が来るだろう。姫を手放してつくづく思う。あの存在自体がどれほど私にとってストレスになっていたか。

それにしても、一昨日、少しだけ取り組んだ翻訳、自分でも呆れるほどケアレスミスのオンパレードだ。提出していなくて良かった。それでも、この数日で私の評価が下がったであろうことは容易に想像ができた。仕方がないと割り切る。とにかく、遅れ気味のレポートをきちんと提出することしか今の私にできることはない。

叔父には叔父の仕事がある。そうそう甘えるわけにはいかない。今後しばらくは仕事量を減らして対処するしかなさそうだ。

3日間はあつという間に過ぎた。時々、人工呼吸器につながれた母の姿が浮かんできた。そして、連結部分を外した時のあの警報音が突然聞こえることがあって、そのたびに私は激しい動悸を感じた。トラックがバックする時のピー、ピーという音を聞いて動悸が始まることもあった。そんな時、私はコップ一杯の水を飲んでのどの渴きを癒した。大抵5分から10分黙って我慢していると少しずつ落ち着いてくる。

仕事は、それなりにこなすことができた。母が倒れる前に比べれば集中力はかなり落ちていているが。新しく依頼される仕事は「面白そうな物」はなるべく避けて、事務的にこなせる簡単なもののみを引き受けるようにした。と言っても、翻訳会社から来る打診は明らかに減っている。私の異変に気づいている様子だった。母が入院したことだけはメールで知らせたが、詳しく書く気にはなれなかった。

仕事が減り過ぎるのも怖かったから。

久しぶりに病院へ向かう。何とも気が重かった。母の姿を見て安心したいと思うが、同時に、やはり意識の無い姿を見るのはつらい。

母が倒れてから10日目になる。3日間、叔父から連絡はなかった。私からもあえて電話をしなかった。何かあったら連絡するから、沙希ちゃんとはとにかく仕事に集中すること、と念を押されていたから。

最初の計画どおり、9月19日午後7時、私は地中海病院の一階受け付け前ラウンジに向かった。叔父は先にソファに座って私を待っていた。

ICUに向かうより先に、叔父は私と喫茶店で話をしたがった。

叔父の表情は暗かった。

この3日間に色々状況が変わったことを説明してくれた。母は肺炎を起こしかけているらしく、今、その治療が行われているようだ。口から入れられていた管は、今、気管切開を施され、そこから直接人工呼吸器につながれているそうだ。

「何だか疲れるね。説明はえらく丁寧だけどさ、結局どうしたらいいのか、わかんなくてね。随分迷ったけど、沙希ちゃんになるべく連絡はするまいと思っていたから、契約書、勝手にサインしたよ。何枚書いたかなあ。いやあ、決めるだけでも大変だねえ。気管切開術の説明聞いてたら、何だか怖くなっちまってさ。だけど、姉さんの口から管が出るのは見ててあんまり気持ちのいいもんじゃないから、喉に穴をあけてもらったのは良かったかな。最初見た時より、多分今の方が綺麗な顔になってるよ」

ひとしきり母の病状を説明してから、叔父は心配そうに続けた。「悪いとは思ったけどさ、お支払いのページを見ちゃったんだよ。

正直言ってぶつたまげた。まあ、高いだろうって想像はしてたけどね。お金……、大丈夫なのかい？」

全然大丈夫なんかじゃない。ホントに気が遠くなりそうだ。ローンを組んだ話をしたら、うーん、と唸って叔父は黙ってしまった。彼は、ローンは金利が高すぎるから、然るべき時が来たらどうしたらいいか一緒に考えよう、と言ってくれた。例えば、少しでも金利の低い借り入れ先があるようなら、借りる先を変えることも考えた方がいいよ、と。それから、いらないサービスがあったら、なるべく削った方がいいね、とも。

私は母が倒れてからパニックになってしまったけれど、叔父は私より長く生きている分、冷静に考えることができるんだろう。もしも叔父が私だったらどうしただろう。

「叔父さん。もしも、叔父さんだったら、どうしたと思う？ 延命処置、お願いしたと思う？」

叔父の返事は早かった。

「たぶんね、地中海病院に運んでもらうこと自体を思いつかなかったと思うんだ。ケチだから。でも、これは本当に難しい問題だね。公立病院に運んでもらったら、それはそれで、後悔するかもしれないしね。延命処置は……、そうだな、多分、断つただろうね。この年になると、倒れたのが自分だったらって、つい考えてしまうんだ。だけど、その場になってみないと実際のところ、わかんないね。でもさ、姉さんは幸せだなんて、しみじみ思ったよ。沙希ちゃんが必要な風に一生懸命に何とかして助けようと努力してきたんだ。お金のことは頭が痛いけどさ。ホント、生きにくい世の中になったもんだね」

母の喉には器具がはめ込まれていた。喉からつながれている呼吸器の管に、黄色いテープは巻かれていなかった。もう必要ないと判断されたのだろう。当然、私も二度とはずすつもりはなかった。

母の顔から呼吸器の管が無くなった分、確かに穏やかに見えた。

けれど、母が哀れであることに変わりはない。

母の状態は、良くなったり悪くなったりを繰り返した。

叔父と私の二人三脚で、週日は私、週末は叔父が病院通いをする事になった。叔父が来てくれたことで、いくつかの改善点があった。リハビリテーションをはじめ、いくつかの項目を削ってもらった。検査や治療薬についても、石黒さんに話をしてくれた。

「ドクターが判断することですし必要な検査しか行っていないから、削ることは難しいと思いますが、治療に支障を来さない範囲で何とかならないか、提案していきます。ジェネリック医薬品についても、打診してみますね」

どこまで家族の意向が通るかわからないが、石黒さんがそう言うてくれたのだから、多少は違うのではないかと思う。

それから数日後、母の容態が悪化したという知らせを聞いて、病院に駆けつけた。

心拍数を示す数字がいつもより高かった。高熱が出ているそうだが肺炎についてやその治療について色々説明があったけれど、正直言って、私にとっては、もうどうでもいいことだった。私が一番知りたかったことは、いつになれば終わるのか、それだけだった。母を早くこの苦しみから解放させてあげたかったし、私自身もいい加減疲れていた。それから、一日数十万円ずつ確実に積み上げられていく費用、それは経済的にも心理的にも私を追い詰める大きな要因になっていた。

いよいよ、母と本当のお別れの時が来る、と思っていたが、峠を乗り越え母は復活した。そして、そのことを素直に喜べない私がいいた。かつて私は、母の命とお金とを天秤にかけている自分自身に罪悪感を抱いていた。でも、今は、そういう余裕さえ無くなっている。叔父も相当に疲れている様子。あまり口にはしないが、経済的な心配をしていることは見ていてわかった。



## 第19話 疲労（後書き）

明日、6月19日（木）に最終話を掲載予定です。

## 最終話 死に要した費用

母は、2ヶ月ちよつとという長期間に渡って、地中海病院のICUのベッドを一つ占領し続けた。流石に、本当に心臓が止まった時には涙が出たが、やっと終わった、という気持ちの方が大きく私を支配していた。

2ヶ月と4日間で、入院治療費は総額3200万円余りになった。初回到支払ったのが596万円で、残りが約2620万円。これを35年間の420回払いで支払うことになっている。一回の支払額は約37万2千円。つまり、私はこれから35年間、毎月37万円をK P金融に支払わなくてはならない。とんでもない数字だ。35年が最長であるため、最初に私が申し出ていた20万円の限度額を大幅に超えた金額になった。私がこれからK P金融に支払うことになる総額を単純に計算すると、1億5624万円になる。つまり利息が1億3千万円以上である。これがローンの恐ろしさだ。叔父は丁寧に金利の仕組みを説明してくれた。

病院へは、叔父が交渉に当たってくれた。母は掛け捨ての死亡保険に二つ加入していた。そのお金が、500万円と1000万円おけるのだ。そのお金と母さんの普通預金240万円を足して、1740万円。残りの800万円余りを叔父が何とか工面するというのだ。

高尾さんは、最初、一旦組んだローンを解約することはできないの一点張りだった。しかし、叔父は粘り強く交渉を続けた。弁護士を立てることまで考えていたようで、最終的に手数料の5万円を支払うことで、一括払いに変更できた。叔父と話をしている時の高尾さんのきつい目、きつい口調は当分忘れることができないだろう。

叔父がいなかったら、どうなったことか、考えるだけでぞっとする。自宅が母名義の持ち家であったことから、高尾さんから、自宅

の権利書を確認させてくれ、とまで言われていたのだ。ローンが支払えなくなった時点で、住み慣れた自宅まで取り上げられるところだった。

母は、脳出血で旅立った。

私はその事実を受け入れるのに要した費用は3200万円。下手したら1億5千万円以上になったかもしれない。

母の四十九日、叔父がお参りに来てくれた。

あまりにも高すぎた母の死に要した費用。叔父に話すと叔父の意見はこうだった。

「もしも公立病院に運んでもらっていたら、沙希ちゃんのことだから、後悔したんじゃないかな。これで良かったんだよ。かなり高くついたけど。ボクも勉強になった。ボクが倒れたら間違っても民間病院に運ばないように家族には念を押したよ」と、笑いながら言った。

母が逝ってから、私は翻訳の仕事を辞めた。信用を失い仕事量が減ったことが大きな理由だったが、母がいなくなってしまった今、無理して在宅で仕事を続けていく必要がなくなったことも理由の一つだった。

運良く、英語の塾講師として採用された。叔父が工面してくれた800万円を少しずつ返すつもりでいる。300万円は叔父の預金から支払われた。残りの500万円は年利2.7%で銀行から借りたそう。叔父は、「500万円分をゆっくり払ってくれたらそれでいいよ」と言ってくれたが、時間をかけてでも800万円を返すつもりだ。

地中海病院は、私にとって忘れたくても忘れられない病院になった。二度とお世話になることはないだろう。最後の交渉に叔父と足を運んでから一度も行っていない。思い出したくもなかった。



半年ほど経って、ようやく心の傷が癒え始めた頃、私は、地中海病院のホームページを開いてみた。懐かしい名前がそこには沢山あった。ICUの看護師さんや新島臨床心理士、それに、あの憎たらしい高尾さんも。けれども、どんなに探してみても石黒さんの名前を見つけることができなかった。それは、私の中に一筋の黒い影を落とした。

病院に電話をかけてみた。コーディネーターの石黒さんをお願いします、としれつと喋ると、4ヶ月前に退職しました、とだけ返事が返ってきた。どこへ行かれたのですか、と尋ねても、それ以上はお答えできません、と冷たい返事だった。

私は、静かに受話器を置いた。

- - - 完 - - -

## あとがき

私の作品に最後までお付き合いくださいまして、本当にありがとうございました。多くの方々はこの作品を気にかけていただいたこと、書き終えて感謝の念で一杯です。それから、何人かのドクターの方には、具体的な助言もお願いいたしました。丁寧なアドバイスを頂いたこと、心から感謝申し上げます。

WEB小説としては、内容的にかなり異端であると自覚しています。今回の作品には恋愛要素も全くなく、娯楽的な要素もほとんどありません。そんな私の小説に、想像以上の数の方々アクセスしてくださいました。これは、昨今、様々な医療関連ニュースが取り上げられるようになり、多くの方々が医療問題へ関心を寄せるようになった一つの証なのかもしれないと感じています。

20年前、まだ私が学生だった頃、米国出身の女性英語教師に頼まれて、病院へ付き添ったことがありました。初めて日本の病院に行くから心配だと言うのです。

診察を終えて、彼女は感激していました。アポなしですぐに専門家に診てもらえたこと、担当医師が優しくかったこと、そして、何より格安であったこと（保険証を持っていました）。帰りの車の中、しばらく彼女が興奮していたのを今でも覚えています。何しろ、彼女は10万円を準備していたのに、請求されたのが800円程度だったからです（実際には2〜3万円位と思っていました）。駐車場代より安い、と繰り返していました。「じゃあ、駐車場代払つてよ」と言いましたが、「これはあなたの車だから私が払う筋合いはない」と、他人に車まで出させておいて酷いアメリカ人でしたが（笑）、外国人の目に日本の医療制度がどのように映っているか、教えられた瞬間でした。勿論、どんな制度であっても問題がゼロということはありません。しかし、彼女の話聞いて少なくとも米国

よりはずっとマシだと思いました。

皮肉なもので、日本の医療制度は米国のそれを追いかけてようとしているように思えます。国の上層部の人たちは皆保険を潰すつもりなのですが、表立ってそう明言することはありません。非難が集まることは目に見えているからです。

ではどうするのがいいか？ 医療費を下げ続けることで、実質的に病院が運営できない所まで持って行きます。現実には、赤字で消えている病院が増え続けていますね。そうすると必然的に自由診療の病院が増えてきます。自由診療では医療の値段を自由に設定できるからです。自発的に保険診療を放棄する医師が増えれば、制度を変えなくても、皆保険制度はいずれ破綻するでしょう。直接手を下すことなく破綻させる。実にうまいやり方だと思います。

さて、一度自由診療の方向に進んでいけば、どこかの段階で、企業が乗り込んでくることは間違いないでしょう。いえ、むしろ、大企業のトップが積極的に政府に働きかけている、と考える方が自然だと思います。

もしかしたら、企業が入り込むことで国民の望む素晴らしい医療制度が展開されるのかもしれませんが。けれども、米国が抱える医療問題を見る限り、私たちを待っているのは、小説で示したような悲惨な状況である可能性の方がずっと高いのではないかと思います。

石油産油国が政府系ファンドとして日本の医療特区の病院に100億円を出資する、というニュースを先日耳にしました。世界に誇る日本の医療技術、そして、米国の十分の一以下というドクターへの人件費。産油国の王様達に日本の医療はどのように映っているのでしょうか。アラブの研修生をそこで研修させる計画もあるそうです。将来は日本のドクターが外国に買われていくのかも知れませんね。

すでに、皆保険崩壊、医療崩壊のシナリオは動き出しています。

私の役割は、これからの10年を私たちが黙って眺めて過ごした場合、日本の医療制度がどうなっているかを皆さんにお見せすることでした。どう判断されるのか、それは皆さんの自由意志に任されています。

私は現在小さな町で開業医をしています。

一生を勤務医という形で医療に捧げるつもりでしたが、結局挫折してしまいました。あのまま勤務医を続けることは不可能だった、という気持ちと同時に、何とも言えない罪悪感を背中に乗せて生きています。そして、その罪悪感が私に小説を書かせています。

私は、どうしても「医師」という立場で物を見てしまいますので、私の作品も、鼻につく所があるかも知れませんが、そういう所を見つけたら「ああ、あんたは医者だからね」と割り引いて読んでいただけると、助かります。

連載を3本続けて書いてきましたが、少々本業の方に支障が出してきました。2018年シリーズは、本業を置いてでも急いで書く必要性を感じていました。日本の医療制度が大変な勢いで変化しているからです。書き終えて、ホッとしています。

ここで、3ヶ月ほどお休みを入れようと思っています。溜まった仕事（患者さんの診察以外にも色々やることがあります）を済ませ

たら、また戻ってくるつもりです。書かなくてはならないテーマが、まだあるからです。

本作品が、少しでも医療問題について考える材料になったら、作者として、これほど嬉しいことはありません。

どうも、ありがとうございました。

また、お会いできる日を楽しみにしています。

G F J

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0204e/>

---

2018年 地中海病院

2010年10月8日11時58分発行